

43045

教科書文庫

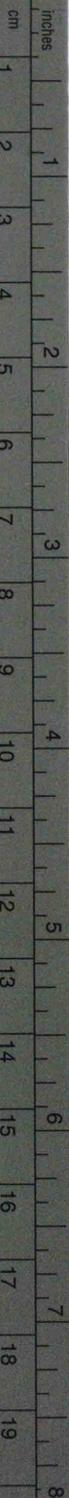
| |
|----------------|
| 4 |
| 220 |
| 51-1913 |
| 20000 33917 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

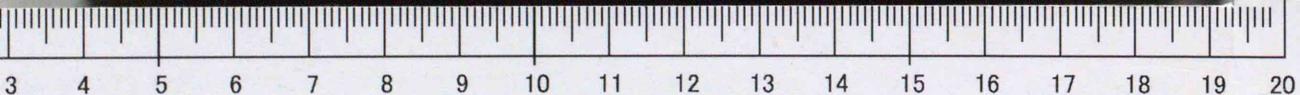
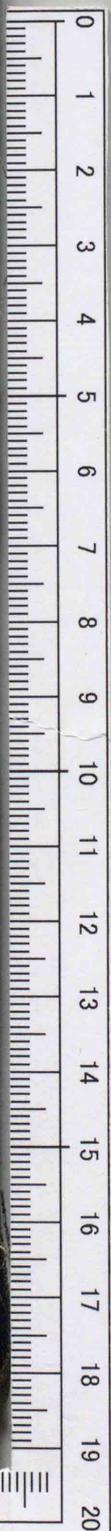
375.9
Na9
資料室

東京高等師範學校教授齋藤斐章著

修正 統合 歷史 教科書

東洋史

師範學校用



資料室

3757
S27

正 修
書 科 教 史 歷 合 統

史 洋 東

用 校 學 範 師

授 教 校 學 範 師 等 高 京 東

章 斐 藤 齋

著

日 二 月 六 年 二 正 大

濟 定 檢 省 部 文

書 科 教 科 史 歷 校 學 範 師

京 東

社 會 式 株 書 圖 本 日 大

唐時代の文集

青島市十日市町
青島縣師範校



目次

緒言……………一頁

上古史……………五

第一 上代の支那……………五

一、支那の開闢―二、唐虞三代―三、周の制度文物―四、春秋の世―五、戰國時代―六、六國の滅亡―七、周末の學術

第二 秦漢の興亡……………一八

一、秦の一統―二、漢楚の争―三、漢の初政―四、武宣兩帝の功業―五、王莽の篡立―六、後漢の初政―七、羅馬との交通―八、後漢の末路―九、後漢の滅亡

第三 支那の分裂 諸種族の動搖……………三一

一、三國―二、西晋―三、五胡―晋の南渡―四、江北の争亂―五、前秦の興亡―淝水の戦―六、南北朝の分立

第四 佛教の興起及び其の東漸……………四〇

一、印度の建國—二、佛教—三、マウリア王朝—四、大月氏の興隆—五、佛教の東流
第五 上代に於ける朝鮮半島及び其の我が

國との關係……………四八

一、古朝鮮—二、三韓後三韓—三、任那の日本府—四、朝鮮半島の征服—五、三韓の盛衰

第六 漢代の儒學・文藝及び其の東漸……………五二

一、漢代の儒學・文藝—二、漢學の東漸

中古史……………五六

第一 隋唐の一統……………五六

一、隋の一統—二、唐の創業—三、武韋の禍—四、開元の治—天寶の亂—五、唐の衰滅—六、西域との交通

第二 五代と宋 遼金の廢興……………六三

一、五代—二、契丹—三、宋の一統—四、遼の極盛—五、西夏の興起—六、神宗の新政—七、金の興起—八、宋の南渡—九、金の盛時—宋の衰滅

第三 中古に於ける朝鮮滿洲及び其の我が

國との關係……………七六

一、高句麗の強盛—二、百濟・高句麗の滅亡—三、新羅と高麗—四、渤海—五、我が國との關係

第四 唐宋の制度文物と我が國の文化……………八〇

一、隋唐の制度と大寶令—二、宗教—三、唐宋の儒學・文藝—四、我が國の文藝

近古史……………九二

第一 蒙古人の興起 元の建國 東西の交通……………九二

一、成吉思汗—二、太祖の西征—三、金の滅亡—四、拔都の西征—五、欽察汗國
六、憲宗の即位—旭烈兀の西征—七、元の太祖—宋の滅亡—八、元の版圖—九、東西の交通

第二 元の衰滅 諸汗國の盛衰 帖木兒大王の業……一〇二

一、海都の叛亂—二、元の衰亡—三、欽察汗國の盛衰—四、伊兒汗國の盛衰—五、察合臺汗國の衰亂—六、帖木兒大王の崛起—七、帖木兒大王の西征—八、オスマンリ、トルコの建國

第三 明の盛衰……一一〇

一、明の創業—二、成祖の篡立—外征—三、明の中世—四、明の衰亡

第四 我が國と支那・朝鮮との關係……一二六

一、高麗と元—二、元と我が國—三、明と我が國—四、倭寇—五、朝鮮の興起—六、豊臣秀吉の征韓

第五 葡・西兩國人の東航 我が國人の遠航……一二二

一、葡・西兩國人の東航—二、基督教の東漸—三、西歐學術の東漸—四、我が國人の遠航

第六 元明の文化 其の我が國に及ぼせる影響……一二八

近世史

一、元の文學—二、明の儒學・文藝—其の東漸

第一 清の建國……一三〇

一、愛親覺羅氏の崛起—二、清の建國—三、聖祖の武功—四、高宗の武功

第二 清の制度・學術……一三九

一、制度—二、學術

第三 莫臥兒帝國の興亡……一四三

一、帖木兒大王以後の印度—二、莫臥兒帝國の建設—三、アクバル大帝—四、莫臥兒帝國の末路

第四 蘭・英諸國の東方經營 英領印度……一五〇

一、和蘭の東洋貿易—二、英國の東方經營—三、印度に於ける英佛の競争—四、印度大總督の設置—莫臥兒帝國の滅亡—五、印度皇帝の號—六、英國の阿富汗經營

第五 英清の交渉 英佛の北清侵伐……一五七

一、鴉片戰役—二、南京條約—三、長髮賊の興起—四、英佛の北清侵伐—五、長髮賊の平定

第六 露人の東略……………一六三

一、露人のシベリア經營—二、尼布楚條約—三、恰克圖條約—愛琿條約—四、露西亞の中央亞細亞經營—五、伊犁事件—六、中央亞細亞に於ける英露の衝突

第七 佛國の後印度經營……………一六九

一、安南事件—二、佛領印度支那—三、清佛の交渉—四、暹羅國との關係

第八 清國に對する諸強國の壓迫……………一七三

一、清國の衰勢—二、列強の壓迫—三、清國の末路

(目次終)

修正 統合歴史教科書 東洋史

齋藤 斐章 著

緒言

一 日本國體 我が大日本帝國は、世界に比び無き國體にして、上に萬世一系の皇統を戴き、下に忠良の臣民あり、一家族の觀念を以て、終始、皇室を中心とし、世、誠忠を盡し、忠君と愛國とは、一途にして二ならざるなり。されば、我が二千五百有餘年間の歴史は、恰も一氏族の沿革を語るに同じく、外國に於て、多くの種族、雜住して篡奪を事とせるものと、固より同日に論ずべからざるなり。

二 日本文明の特徴

我が國體は、千萬世を通じて變ることなけれども、制度・文物に至りては、然らず、紀元九百年代より、大陸の文明を吸入し、之を我が固有の文明と融合して、一大發展を遂げたり。殊に、儒教は、我が固有の道徳を發揮せしめて、益、忠孝の美風を涵養し、佛教は、古來の國民思想に、一段の進境を促し、政治・教育より美術・工藝に至るまで、概ね、此の二教の影響を蒙らざるはなし。故に、我が近世以前の歴史は、一の東洋文化史とも見るを得べし。

然るに、近世の末葉以後、漸く西歐近代の文明を輸入して、能く之を同化し、東西兩洋の文明を融合して、我が國獨得の文明を生成したり。是に於て、從來、大陸より輸入せしもの、今は、反つて我が文明を大陸に移植するに至り、我が國は、東洋の先進國となれり。

三

支那の國體

我が國文化の發達は、支那の文明に負ふ所、大なれども、國情に至りては、大に異なり、支那に於ては、或は禪讓により、或は放伐によりて帝位に即くを立國の體となし、智徳、衆に勝れ、強勇、群を抜ける者、出でて天子となる例なりしかば、政權爭奪の亂は、今古を通じて免れざる所にして、王朝交代の頻繁なること、世界に比類少なく、永く國祚を保つ者と雖も、三百餘年に過ぎざりき。されば、明君なる者は、外征の功を立て、下民を威壓するか、宗族を封じて藩屏を固むるか、或は民を愚にするかによりて、帝業を持續せんことを力めたり。且つ、質朴なる上古の風を理想として、古聖賢を崇拜せしかば、支那は、東洋文明の先進國なるにも係らず、其の進歩、遅々として見るべきものなく、數千年間に涉れる支那歴史は、單に王朝の交代史たるに過ぎざる觀あり。

incomprehensibility

四 東洋諸人種 東洋史上に活動せる人種は、印度アリア種を除きては、凡て黄色人種に屬す。今、黄色人種中の重なる者を擧ぐれば、左の如し。

- 日本種
- 韓種
- 蒙古種
- 滿洲種
- 土耳其種
- 西藏種
- 漢人種
- 苗人種

支那は、主として漢人種によりて建設せられ、蒙古種・土耳其種・滿洲種等の諸種族と接觸して、或は争闘し、或は融和して、以つて支那五千年の歴史を作れり。



支那

地理國名ナリ。

清、唐、十、ト、公、邦、於、之、其、其、

表、文、我、國、

後、國、

轉、

China, Ching-shin

上古史

上古は、支那の開闢より、我が紀元千三百年代までを含む。支那には、孔子・孟子出でて、儒教を創め、印度は釋迦出でて、佛敎を唱へ、所謂、東洋文明の要素は、この間に生成し、是等の文明は、上古の末葉より朝鮮半島を経て、我が國に流入せり。

第一 上代の支那

一 支那の開闢 今を距ること、凡そ五千餘年以前に當り、漢人種、西北方より黄河沿岸に移住し來り、苗人種を逐ひて、其の地に土着したり。初め、數多の部落に分れて、各、君長を戴き、統一する所なかりしが、其の後、君長の中より推されて天子と

漢人種

君主

(一)三百五

伏羲氏

神農氏

上古史

上代の支那

(一)五、五、甲、

顓頊

五帝

五

外、地、皇、氏、

五帝

唐虞時代

周室東遷
(皇紀前一〇)

を作り、制度を定めたり。成王より十代を經、平王に至り、戎狄に逼られて、都を洛邑(河南省河南府)に遷せり。これを周室東遷といふ。

周系圖

古公亶父—王季—文王—武王—成王—平王—威烈王—赧王

周公旦

改派 大將

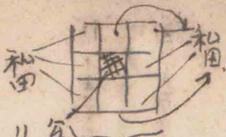
三 六官

周の制度・文物 周の官制は、中央政府に、六官あり、天官(冢宰)地官(司徒)春官(宗伯)夏官(司馬)秋官(司寇)冬官(司空)是なり。天官は庶政を統へ、地官は教化を掌り、春官は禮樂・祭祀を掌り、夏官は兵馬を掌り、秋官は刑律を掌り、冬官は工藝を掌れり。六官の外に、三公(太師太傅太保)三孤(少師少保)天子を輔佐せり。されど、政務にあづからず、また、常置の官にもあらず、この六官・三孤を九卿と云ふ。

井田法 九卿

田制は、九百畝の地を九分して井田とし、其の八分を私田と

三公三孤
天子の顧問
ト九モナリ。



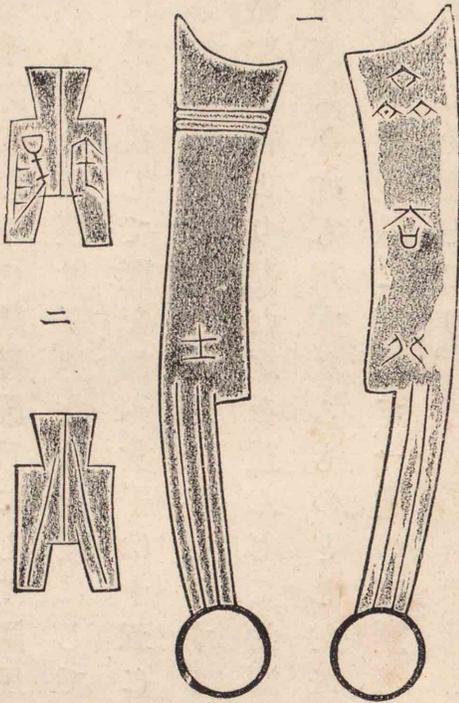
一家ノモノナリ、
一畝ノ成ノモノナリ、
リテ、コレヲ官ニモナシ、

萬乘、千乘、
千トアルハ、支邦人ハモトハ、
車ノ上ニ三ツア、戰ヲサセセリ。

貨幣

兵制

國學



周の代貨幣

一 幣貨齊布
二 幣貨齊布
刀錢の國戰の韓頃の陽宅に文のもし
云とに陽宅に文のもし
刀錢の國戰の韓頃の陽宅に文のもし
云とに陽宅に文のもし

し、其の一分を公田とし、八家力を合せて公田を耕し、公田の收穫を官に納めて田租に充てしめ、更に力役・布縷の征あり、
後世、租庸調の起原なり
又、貨幣も鑄造せられて、民間に流通したり。兵制は、井田の制に従ひて、士卒兵車を徵發し、一萬二千五百人を以て、一軍とせり。天子は萬乘・六軍、諸侯は千乘以下、三軍乃至一軍を編制せり。學校に、國學と郷校とあり、郷校(小學)は夏に校といひ、商に序といひ、

庠序學校

周に庠コウといひ、洒掃應對進退の節を教へ、國學（學大）に於ては、已を修め人を治むる道を教へ、禮樂射御書數の六藝を教科とせり。

習慣

天子諸侯以下の階級嚴重にして、國民は、士・農・工・商に分れて、其の業を世襲せり。男女は、七歳にして席を同じうせず、男子は二十にして冠を加へ、女子は十五にして笄を加へ、己をよぶに名を稱し、人を呼ぶに字を稱するを禮とせり。

禮樂

禮樂は、古より甚だ之を重んじて、治國の要具とせり。禮は冠婚喪祭を尤も重大なるものとし、父母死すれば、三年の喪あり、其の他、親疎に應じて、一定の喪期あり、其の期間は、喪服を着くるを禮とせり。

四

春秋の世 平王より以後、約三百年間は、周室ます／＼衰へて、殆ど無政府の状態となり、有力なる諸侯は、王命を藉りて

周ノ王威及ラス、
其人オコリテを
國ヲ治スルヲ試ム。

桓公
管仲計

春秋の世
（皇紀前一
一〇一後
二五八）

宋襄公

微管仲（吾其披髮左衽矣）孔子

五霸

一 齊桓公

宋襄公
齊桓公
魯文公
晉文公
秦穆公
楚莊王
吳王闔閭

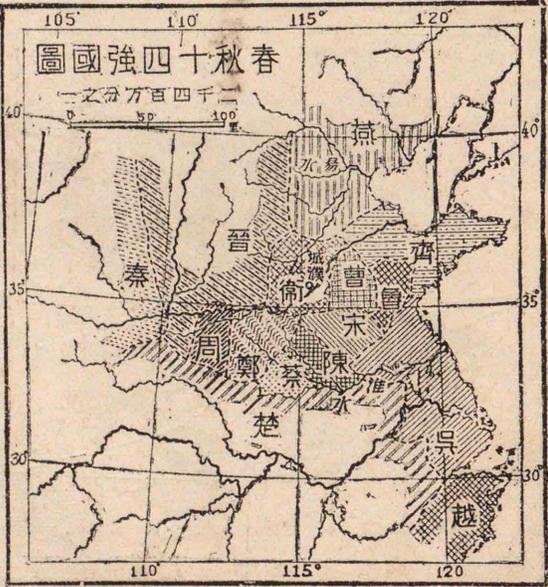
二 晉文公

秦穆公

楚莊王

吳王闔閭

國中に號令するに至れり、之を春秋の世といふ。齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、楚の莊王、越王勾踐、代る代る興つて、霸となれり。之を五霸と稱す。齊、桓公、管仲を用ひて富國強兵をはかり、王室を尊び、戎狄を攘ひ、功業、五霸に冠たり。齊、桓公卒し、宋、襄公、一たび諸侯を會したれども、業成らずして卒し、晉、文公、王命を受けて、諸侯に霸たり、秦、穆公は、周の故地に據りて、西戎に霸たり。其の後、楚、莊王は、大に晉兵と戦ひて之に克ち、之に代りて霸となれり。吳王闔閭は、楚の亡臣、伍子胥を用ひ、



上古史 上代の支那

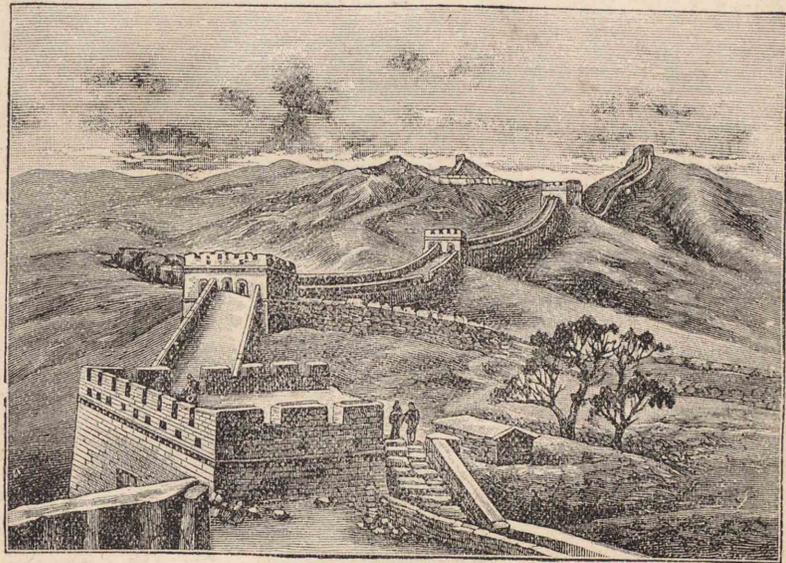
孫・吳

守・尉・監

守 尉 監
長官
木尉
御史大夫

秦の始皇帝
(四一五—
四五二)

壁高厚各二十尺、
上可三騎行、起臨
洮至遼東一



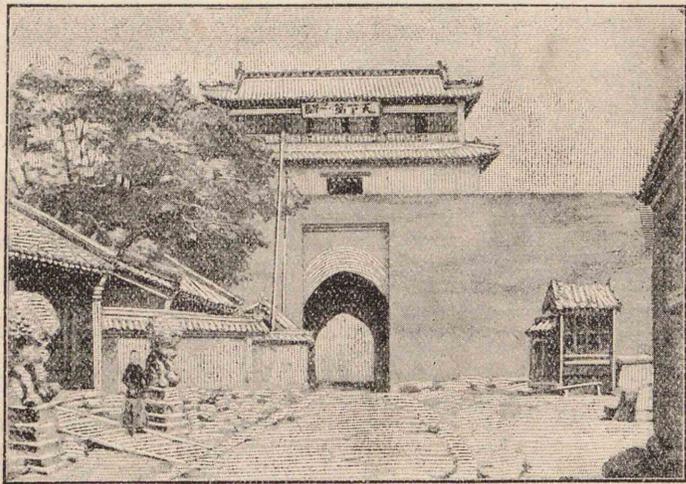
萬里の長城 國の頃始め築きたる始皇帝の臨洮
計(計者羣昌府)よ東襄平(盛京省)に至るまで築けり
本圖は北西約十二里八遠附近なり

家の祖孫武吳起は兵
家の祖と稱せられ諸
子百家並び起れり。

第二 秦漢の興亡

秦の一統 秦王政已
に六國を滅して全國
を一統し、自ら始皇帝
と稱し、都を咸陽(陝西省咸陽縣)
に奠め、李斯の議を用
ひて、悉く兵器を收め、
全國を三十六郡とし、
各郡に守尉監を置き、

丞相・太尉
御史大夫



山 海 關

直隸盛京二省の境にあり萬里の長城の東端直隸省臨榆縣にあり

地を征して、大に領土を弘め、秦の威名、遠近に轟けり。されど、

朝廷には、丞相・太尉・御史大
夫の三大官あり、中央集權
の實、始めて舉れり。帝、大に
土木を起して阿房宮を造
り、又、諸國を巡遊して帝威
を示せり。
時に、土耳其族の一種、匈奴、
北方に起り、屢、中國に入寇
せしかば、蒙恬をして大軍
を率ゐて之を伐たしめ、萬
里の長城を増築して之が
防禦に備へ、又、南の方、越の

始皇帝

王ハ三子アリ
徳帝三王五帝
天子曰朕
自稱

宦官
宦官趙高
陳勝・吳廣
項羽・劉邦
書足以記姓名
而已、劍一人敵不
足、學萬人敵
(項羽)
三條 劉邦
人ヲ殺スモノハ殺シ、
人ヲキツクモノハ
ハ別ス。

秦の滅亡 (四五四)

國用之が爲に乏しく、賦歛愈重く、法令亦峻嚴を極めたれば、國民漸く新政を厭ひ、學者の當世を誹議するもの少からざりき。始皇帝因つて挾書の禁を設け、民間の詩書を燔き、咸陽の儒生四百餘人を坑殺せり。始皇帝崩じ、二世皇帝立つに及び、叛亂四方に起り、秦は僅に三代十五年にして滅亡せり。
漢楚の争 二世皇帝の位にあるや、宦官趙高恣に皇室大臣を殺して政權を恣にせしかば、陳勝吳廣先づ起り、群雄諸方に蜂起せり。中にも、項羽、劉邦、尤も著はれたり。項羽は、兵を江東(江蘇)に起し、劉邦は兵を沛(江蘇)に起し、共に秦を伐ちしが、劉邦先ちて關に入れり。時に二世皇帝、趙高に弑せられて、孺子嬰、王となり、出でて劉邦の軍門に降り。是に於て、劉邦秦の苛政を除き、民心を收めしが、項羽來るに及び、先づ劉邦と鴻門(省陝西)に會し、また己れの勢をたのみて阿房宮を燒き、

漢の三傑

力拔山兮氣蓋世
時不利兮離不逝
(項羽)

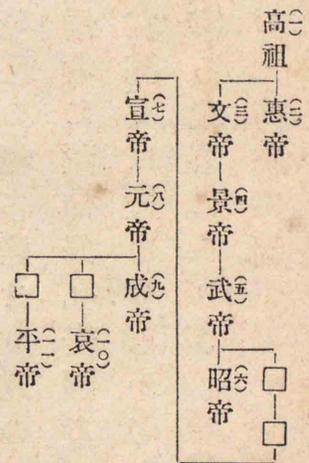
垓下の戰 (四五九)

三

前漢の世 (四五五-六六九)

呂氏の禍
文帝の恭儉

始皇帝の塚を發き、降王子嬰を殺して東に歸り、自ら彭城(江蘇)に都して、西楚の霸王と稱せり。劉邦、項羽と天下を争はんと欲し、蕭何、張良、韓信の三傑を用ひて、兵を練り、糧を蓄へ、自ら軍を率ゐて、項羽と戰ふこと數年に及びしが、遂に垓下(安徽省)の戰に、最後の勝を占め、都を長安(今陝西)に定め、帝位に登れり。之を漢の高祖となす。項羽南(江蘇)に歸り、漢の初政 漢の高祖、秦の孤立して早く亡びたるに鑑み、封建の制を定め、子弟同姓を封じて王としたれば、高祖の末年には、劉氏の王たるもの、九國に及び、其の領土、全國の半ばに過ぎたり。
高祖崩じて、子、惠帝嗣ぎ、呂太后、政を執り、呂氏權を恣にせしが、太后崩じて後、大臣、陳平、周勃等、諸呂を誅して、文帝を迎立てり。文帝、儉素を旨とし、田租を減じ、嚴刑を廢せしかば、國庫

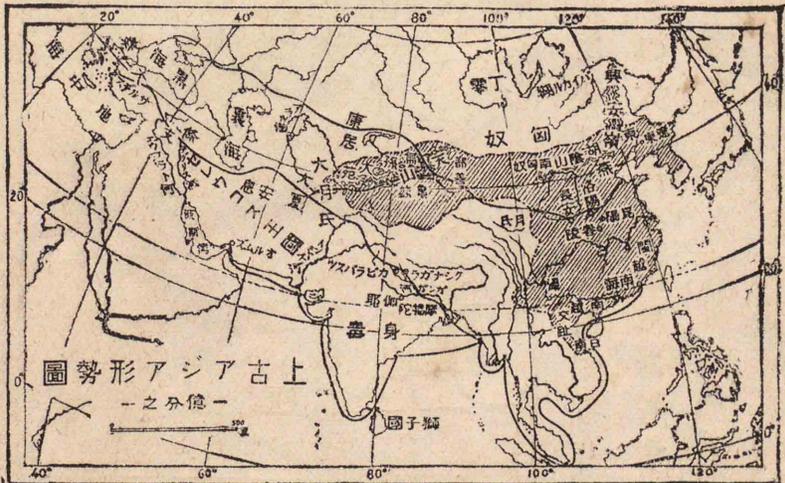


武帝の武功
冒頓單于

衛青・霍去
病

漢の初、匈奴の冒頓單于、北邊に寇し、高祖親征して、反つて平城(山西)に圍まれ、僅に難を免れしが、是より中國を侮り、屢入寇せしかば、武帝、衛青、霍去病等をして之を討たしめ、遠く漠北に驅逐したり。

帝、又、南越(今の廣東、安南地方)を平げ、西南夷



張騫



幣貨の(アリトクバ)國夏大

アリトクバは面表 藏所館物博スリキマイ
せ裝武き戴を冠王の王スメクロイフ王
跨に背馬るせ躍飛王同は面裏 像身半る
と王スメクロイフ敵無に文りな所りあり



幣貨國氏月大

の世二スセィフドカ王氏月大
せ造鑄(代年百八元紀が我)時
向に盛隆氏月大時の王のもし
北し領を帯一部北西の度印ひ
りたし途でまに河ムアは

(今の雲南、貴州)を服屬して、地を南方に廣め、古朝鮮を亡して、この地に四郡を置けり。

帝、匈奴を夾み撃たんとし、張騫を大月氏(中亞)に使せしめしが、騫途にて匈奴に囚へられ、後、逃れて、終に大月氏國に達して歸り、是より、身毒(印度)安息(今のイラン)等、西域諸國との交通、開けたり。

武帝、遠征を事とし、頻りに土木を起し、かば、國庫窮乏し、酷吏を用ひて、課税を重くし、鹽酒の專賣を行ひ、民の利を奪ひしかば、晩年、國內、漸く亂

宣帝の治
呼韓邪
郅支

れんとするに至れり。一代を隔て、宣帝の世に至り、賢相良吏を用ひ、國內能く治まり、中興の祖と稱せらる。帝、烏孫と協力して匈奴を挾撃して大に之を破れり。其の後、匈奴に内亂起り、呼韓邪、郅支の二單于に分れ、呼韓邪單于は、漢に歸降し、郅支單于は、漢と戦ひて敗死したり。

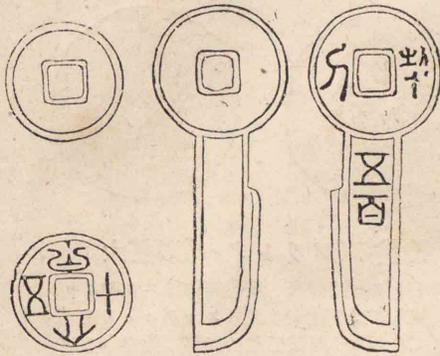
五

王莽の篡立

宣帝の後、名主なく、元帝の世には、宦官弘恭、石

弘恭・石顯
王莽

新(六六九
—六八三)



建始莽王 幣貨の莽王
布貨貝貨龜貨銀貨金貨錢年二國
(錢)泉人に文は錢大 る造を貨
契 銖六重餘分九徑りあと十五
に文寸二長し如の錢大は環の刀
りあと百五刀契

顯權を擅にし、成帝の世には、外戚王氏、政を執りしが、王莽遂に平帝を弑して、自ら帝位に即き、國を新と號せり。王莽初め自ら周公に擬せしが故に、篡國の後、諸制度、すべて周の古法に倣ひ、法令、煩にして

後漢(六八
三—八八〇)

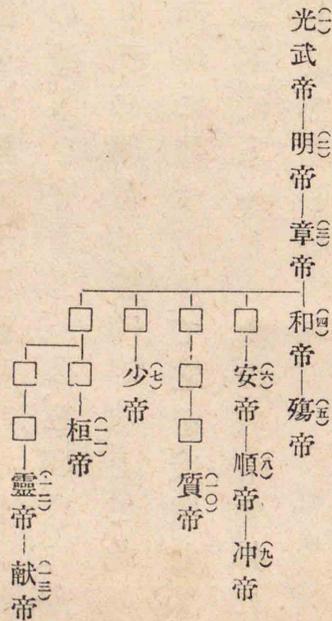
六



漢代風俗 漢武の陵石室彫刻にせしめ
後漢の桓帝建和元年の築造に係る 漢代風俗の知に足る

賦歛重かりしかば、幾ならずして、反亂、四方に起り、新は僅に十五年にして、漢の裔劉玄に亡されたり。

後漢系圖



後漢の初政 劉秀は、兵を春陵(湖北)に起し、王莽の軍を昆陽(河南)に破りて後、衆に推されて帝位に即き、都を

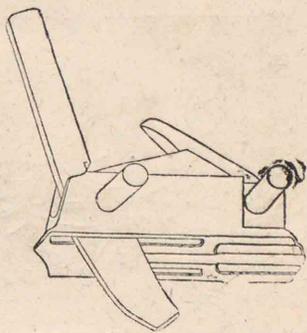
人苦不足、既得
レ隨復望レ蜀
(光武帝)

明帝の治

竇固

不レ入二虎一穴一不レ
得二虎子一 (班超)

蔡愔



弩石の代漢
分一十一潤寸三長

洛陽(河南省)に定めたり。之を後漢の光武帝となす。帝は、武臣を退けて、文吏を進め、大學を起し、禮樂を修め、殊に名節を獎勵し、子明帝、孫章帝、皆よくその遺業を守りしかば、學問、盛に起れり。殊に、明帝は、竇固等をして、北匈奴を征せしめ、班超をして、西域に使せしめて之を威服し、又、蔡愔をして、佛教を遠くインドに求めしめ、漢の威令、塞外に行はれ、後漢の隆盛、この時を以て最となす。

七

甘英

至二桓帝延熹九年一、
大秦王安敦遣使、
自二日南徼外一獻二
象牙犀角瑠璃一始
乃一通焉(後漢書)

羅馬との交通 班超、西域都護に任ぜられ、恩威並び施し、漢の威令、葱嶺の東西に振ひしが、甘英を大秦國に遣し、シリアに達し、西亞細亞の諸國を巡察せしめたり。大秦國は、即ち羅馬帝國にして、當時、亞細亞、歐羅巴に跨れる大版圖を有し、シ

安敦



スウリレウア、スクルマ
スウニトンア
年一六一紀西
スレドは圖本
侵間の目眉り係に藏所館物博ンテ
見想を人の其く能所ざらかべす
りた作傑の代當る足にるむしせ

ども、常に、安息人に妨げられたり。後漢の末に至り、大秦國王、安敦(Antoninus Pius)使を發し、海路より日南郡(今安南)に至り、始めて洛

リアは、其の領土となり、安息と境を接せり。當時、支那の絹は、西アジア人の手によりて、僅に大秦に輸入せられ、價も頗る不廉なりしかば、大秦は、直接に漢に通せんことを欲したれ

大秦との交
通(八二六)

八

陽に達し、是より、大秦の商人、今の東京地方に來りて、貿易に従事せり。
後漢の末路 初め、光武帝意を用ひて外戚の專權を抑へしが、和帝以後、歴代、幼主、位に即き、母后、常に政を攝せしかば、外

桓帝

威專權の弊漸く起れり。桓帝の時、宦官の力によりて、外戚梁氏を滅し、かど、是れより宦官功を負ひ、外戚に代りて、政權を握るに至れり。是に於て、學者、宦官の跋扈を憤り、盛に之を攻撃せしかば、宦官目して黨人となし、竇武以下、百餘人を殺し、六百餘人を禁錮せり。之を東漢黨錮の禍といふ。此の後、人心の動搖、日に甚だしく、黃巾等の賊、四方に起れり。尋いで、袁紹、禁中の兵を以て、宦官を殲滅せしかども、董卓、威權を専らにし、獻帝を挾んで、都を長安に遷し、尋いで、己れも、朝臣の爲に殺されたり。

東漢黨錮の禍(八二九)

黃巾の賊起る(八四四)

董卓

許劭

治世之能臣、亂世之奸雄(相者) 劉備と諸葛亮 孤之有孔明、猶魚之有水 (昭烈帝)

この時、天下は殆ど無政府の状態となりしが、曹操、權略に富み、獻帝を許(河南)に迎へ、帝命を挾んで、悉く黄河の南北を定め、更に南して襄陽(湖北)の劉表に迫れり。時に、漢の疎族劉備、劉表に頼りしが、劉表死し、襄陽、陷るに及び、曹操の銳を避け、

九

諸葛亮の勸に従ひ、援を江南の孫權に求めしに、權の將周瑜、大に操の軍を赤壁(湖北)に破りしかば、操は南侵の志を絶てり。

後漢の滅亡 已にして、劉備、漸く勢を得、巴蜀漢中の地を取りて、成都に都し、曹操は江北を領し、孫權は江南を略有したれば、天下、三分の勢、成れり。

この時、獻帝は、猶、帝位にありしが、曹操の死後、其の子丕、位を篡ひて、國を魏と號し、洛陽に都せり。是に於て、劉備も、帝と稱せり。之を蜀漢となす。尋いで、孫權は、建業(江蘇)に都して、國を吳と稱せり。

三國鼎立 (八八九—九二三)

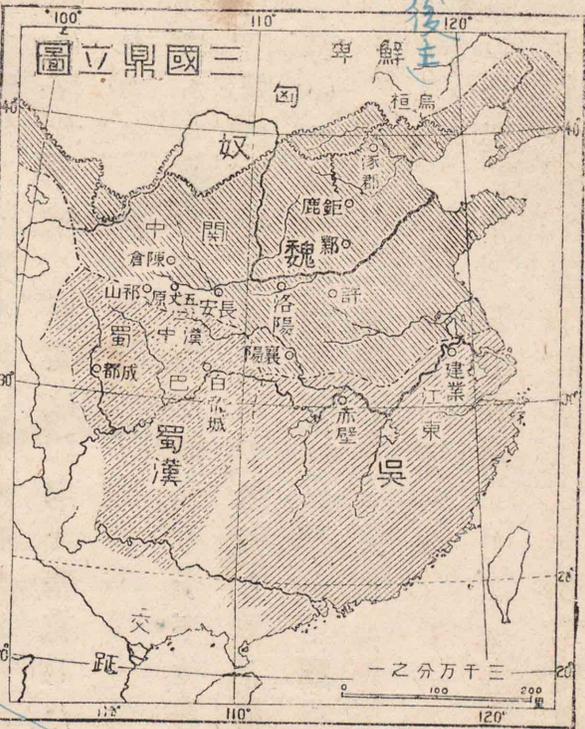
第三 支那の分裂 諸種族の動搖

一 三國 魏・吳・蜀漢鼎立の勢をなし、互に相持して下らず、蜀漢

三國志 此魏吳蜀三國 魏(八八〇—九二五) 蜀漢 吳

蜀漢(八八
一九三三)

諸葛亮の劉備は、一時、吳と
 荆州(湖北省)を争ひし
 が功を成さずして
 崩じ、其の子禪嗣ぐ
 に及び、諸葛亮、政を
 輔け、忠貞の節を盡
 して軍國の重事に
 當り、漢室を恢復せ
 んことを欲し、先づ
 吳と和し、力を專に
 して魏を攻むること前後七年に及びたれども、魏の將司馬
 懿能く防ぎしを以て、亮は志を得ずして遂に陣没せり。是れ
 より、蜀漢、次第に衰へて、終に魏に亡され、魏も、亦、司馬懿の孫



諸葛亮の劉備は、一時、吳と
 荆州(湖北省)を争ひし
 が功を成さずして
 崩じ、其の子禪嗣ぐ
 に及び、諸葛亮、政を
 輔け、忠貞の節を盡
 して軍國の重事に
 當り、漢室を恢復せ
 んことを欲し、先づ
 吳と和し、力を專に
 して魏を攻むること前後七年に及びたれども、魏の將司馬
 懿能く防ぎしを以て、亮は志を得ずして遂に陣没せり。是れ
 より、蜀漢、次第に衰へて、終に魏に亡され、魏も、亦、司馬懿の孫

司馬懿の孫
 懿能く防ぎしを以て、亮は志を得ずして遂に陣没せり。是れ
 より、蜀漢、次第に衰へて、終に魏に亡され、魏も、亦、司馬懿の孫

諺曰招不足、狗尾續、

吳(八八九
一九四〇) 二



諸葛亮祠

四川成都南門外に堂宇南に其の西に池あり柳樹を植う

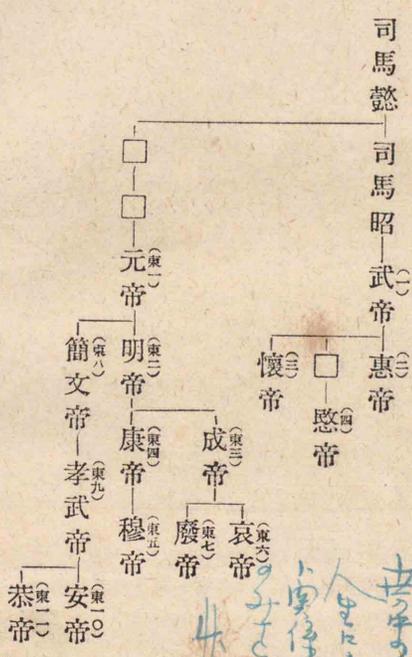


魏銅雀臺瓦
 漢獻帝建安五年(一五五)曹
 操薨るに其の子曹芳が
 繼承す

司馬炎に國を篡はれた
 り、炎、更に吳を併せて、國
 内を一統し、洛陽に都せ
 り。之を西晋の武帝とな
 す。
 西晋 武帝、已に杜預等
 をして吳を滅さしめて、
 天下を統一し、子弟を封
 じて、帝室の藩屏となし

西晋(九二五-九七六)
八王の亂
(九五-九六六)

しが、反つて後年の患を醸し、其の子、惠帝の世には、趙王・齊王等の八王、權を争ひ、互に攻伐して骨肉、相殘害せり。されど、時の學者名士は、老莊の學を講じ、清談に耽りて、一人の國事を憂ふるものなく、國民の元氣、全く消耗せり。



世の衰へは、自らして
人々にうらみ、社会の因らぬ
上、自らを責むる
自己の正義

この機に乗じて、夷狄、塞内に亂入し、江北は争亂の衢となり、西晋、遂に滅亡するに至れり。

揚子江の地

五胡十六國

北の柔然
五胡十六國

(國 六 十 胡 五)

| 人種 | 國名 | 存在年數 | 建國者 |
|------------|------|---------|-------|
| 匈奴 (トルコ種) | 漢、前趙 | 四世 二十六年 | 劉淵、劉聰 |
| 夏 | 北涼 | 二世 四十一年 | 沮渠蒙遜 |
| 鮮卑 (トルコ種) | 後趙 | 三世 二十五年 | 赫連勃勃 |
| 鮮卑 (モンゴル種) | 前燕 | 七世 三十四年 | 慕容廆 |
| | 後燕 | 二世 三十四年 | 慕容廆 |
| | 南燕 | 五世 二十四年 | 慕容垂 |
| | 西秦 | 二世 二十三年 | 慕容德 |
| | 南秦 | 四世 四十七年 | 乞伏國仁 |
| 氏 (チベット種) | 前凉 | 三世 四十八年 | 秃髮烏孤 |
| | 後凉 | 六世 四十四年 | 苻健 |
| 羌 (チベット種) | 後秦 | 一世 八十年 | 呂光 |
| | 成漢 | 三世 三十四年 | 姚萇 |
| 巴蠻 (苗人種) | 成漢 | 五世 三十二年 | 李雄 |

上古史 支那の分裂 諸種族の動搖

桓温

得ず、其の後、桓温、巴蜀を伐ちて、氏種の成國を滅し、かど、間もなく、苻堅の爲に奪はれて、勢亦、振はざりしが、苻堅の來侵するに及び、東晋の相、謝安は、姪、謝玄をして、兵八萬を率ゐて、これを淝水(淝水、安徽)に邀撃せしめ、苻堅大敗して、北に還れり。

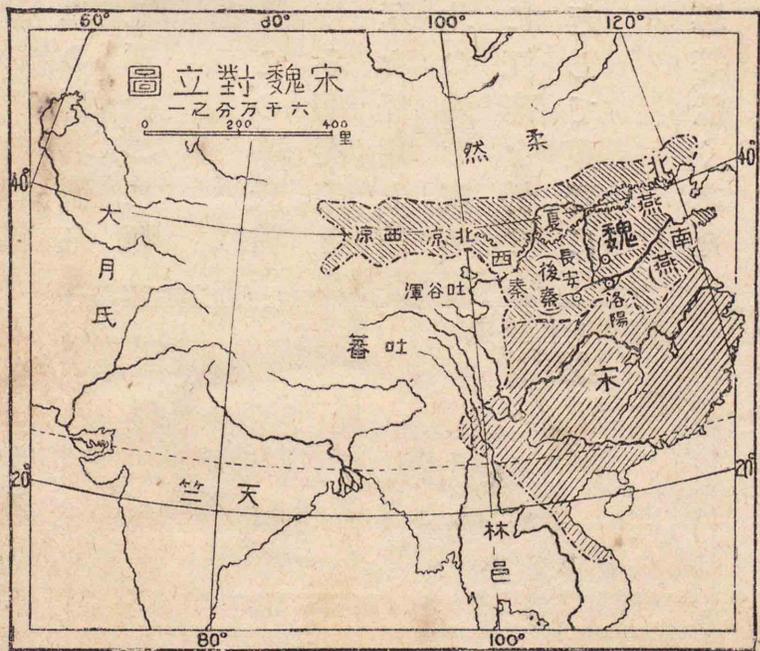
南北朝の分立 苻堅の敗後、江北の地、四分五裂し、匈奴、鮮卑、氏、羌の諸族

時人曰、安石不肯出、將如蒼生、何

淝水の戰 (一〇四三)

後魏(一〇四六—一一九四)

六



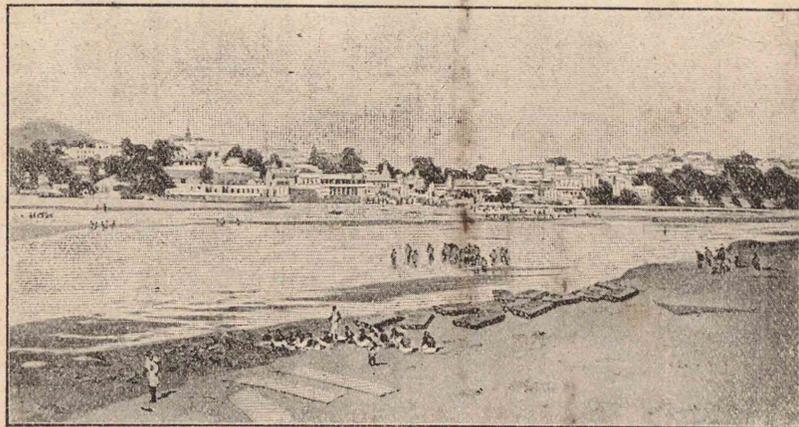
太武帝江北一統(一〇九九)

孝文帝洛陽遷都(一一五四)

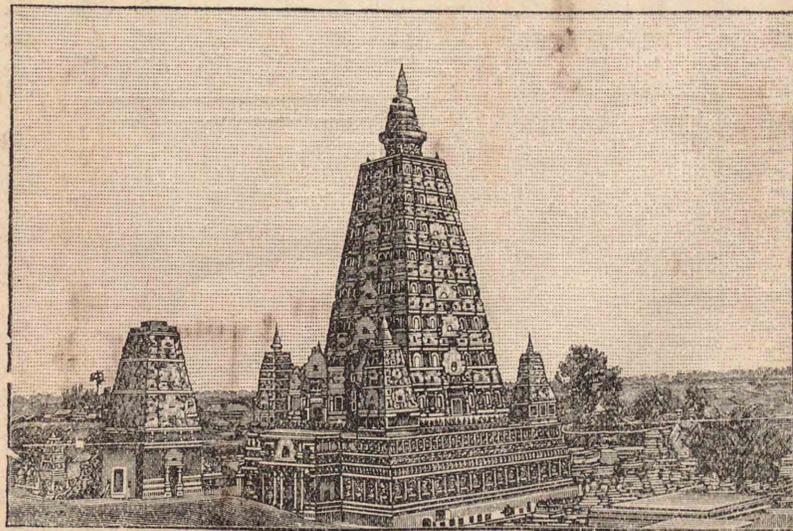
各、一方に割據せしが、中にも、鮮卑の拓跋珪は、國を魏と號し、帝位に平城(山西)に即き、次第に土地を廣め、其の孫、太武帝に至りて、遂に江北を一統せり。されど、後魏は、なほ蠻風を存し、其の俗、極めて粗野なりしが、太武帝の玄孫、孝文帝に至り、都を洛陽に遷し、國姓を元と改め、胡俗、胡語を禁じ、禮儀、衣服、すべて漢族に倣ひたり。學藝、文化、之が爲に、進歩せしかど、是より、驕奢、柔弱の風、行はれて、國力、漸く衰微したり。

東晋は、淝水の戰に勝ちて、一時、少康を得しが、幾ならずして、内亂相繼ぎ、其の將、劉裕能く之を鎮定し、又、屢、外征の功を立て、遂に帝位を篡ひて、國を宋と號したり。之を宋の高祖武帝となす。東晋は、十一代、百四年にして亡びぬ。是より、宋を南朝、後魏を北朝と稱し、支那は、南北兩朝、相對立すること、凡そ百七十年に及べり。

尼連禪河



釋迦成道地紀念塔



釋迦恒河之支流尼連禪河佛耶到正覺入

婆羅門教

られたる土人なり。

宗教は婆羅門教、早くより行はれ、吠陀の經典より脱化したものにして、四種姓の差別を本とし、宇宙の主を梵天と名づけ、靈魂は梵天より出でて輪廻する者とせり。

五明

僧族は、聲明(學語)、巧明(學機)、方明(學機)、醫方明(學醫)、因明(學論)、內明(學理)の諸學に通じたれども、宗教學問を私して、之を世に弘めず、他の種姓を壓し、王族と雖も、其の壓制に苦しみ、奴隸の如きは、説法を聽くことさへ許されざりき。

二

悉達太子
(又喬多摩)

佛教 然るに、中印度の迦比羅城主の子に、悉達太子といへるあり。二十九歳の時、王宮を棄て、摩揭陀國の山林に入り、苦行六年の後、佛陀伽耶なる菩提樹の下に趺坐して成道し、こゝに佛教を開き、一切衆生の平等を唱へて、種姓の別を打破したり。釋迦牟尼佛、是なり。釋迦は姓にして、牟尼は賢者、佛

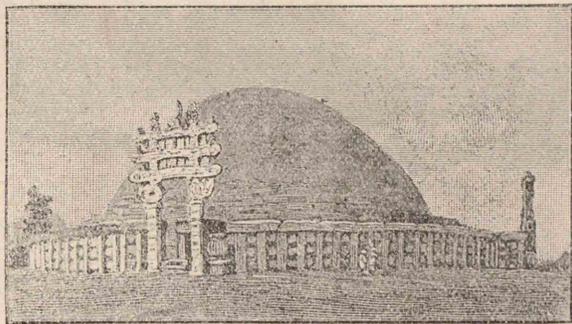
上古史 佛教の興起及び其の東漸

釋迦入滅
(二七六)

第一回結集
(二七六)

第二回結集
(二七六)

三



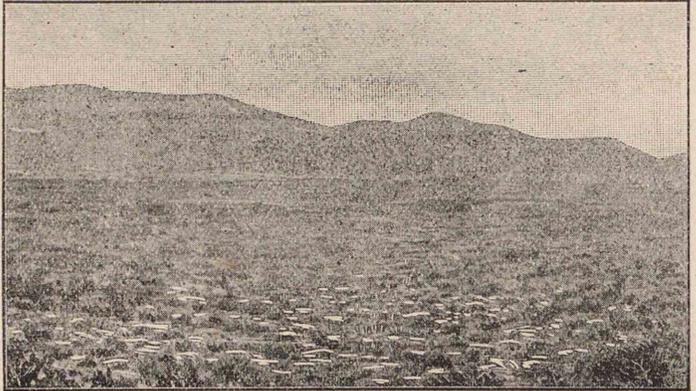
印度摩沙之佛塔 紀世四世紀の建設に係る

して、摩揭陀帝國、中印度を一統せしが、其の末葉に及びて、アレクサンドル大王の侵入に遇へり。此の頃、チャンドラ、グプタといへるもの、奴隸より起りて、摩揭陀國を奪ひ、マウリア王

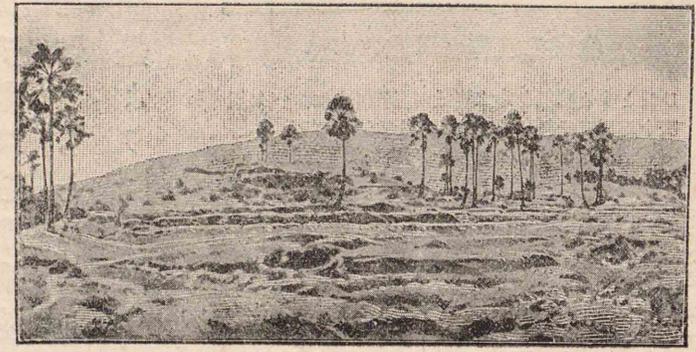
陀は覺者の義なり。釋迦は、成道の後、諸國を巡りて說法せしが、八十歳にて入滅せり。時に我か紀元一七六(西紀前四八五年)年なり。此の年、大迦葉、五百人の高僧を王舍城に會して、第一回の三藏結集をなしたり。三藏とは、經・論・律の三書をいふ。其の後、百年にして、耶舍陀、七百の高僧を吠舍釐城に會し、第二回の三藏結集をなせり。後、城、三回モ及ぶ。

マウリア王朝 釋迦の滅後、幾ならず

マヤシオンの
景遠の山驚るけ於に城舎王



新王舎城

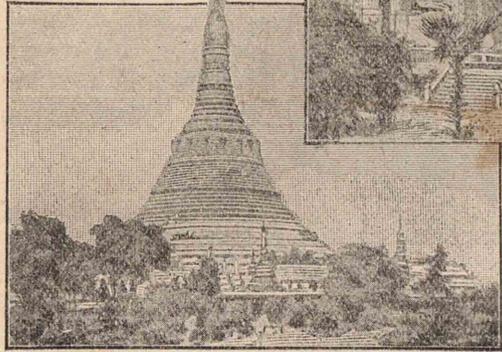
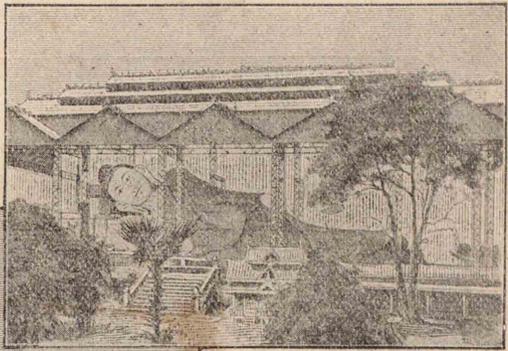


ビンピのラサに設建に係る

の將、セレウコスは、シリア王となり、チャンドラ、グプタと兵を

朝を創め、希臘の守兵を、印度河畔より驅逐せり。アレクサンドル大王の死するや、其

阿育王



像寢の迦釋と塔佛のグベ

細旬ケにありての釋迦の髮二本を埋せしめしと云ふ
高き二百八十八呎(底)周圓千三百五十呎
千餘年前に築せしものなりと云ふ

交へしが、後、和して其の女を妻はせ、使節メガステネスを摩揭陀の國都華氏城(今パトナ)に留まらしめしかば、印度・シリアの交通、是より開けたり。

チャンドラ・グプタの孫阿育王は、四方を征服して、其の領土、印度河より、ブラマプトラ河に弘まれり。王は厚く佛教を信じ、八萬四千の塔を立て、紀元四一二年、華氏城に千人の

第三回結集
(凡四一〇頃)

高僧を會して、第三回の三藏結集をなし、又王子マヘンダをして獅子國(セイロ)に布教せしめしかば、佛教は、是よりセイロン島、緬甸、暹羅等に流布し、所謂南方佛教を分派するに至れり。

第四回結集
(凡七二〇頃)

大月氏の興隆 阿育王の死後、間もなく、マウリア朝、亡びしが、前漢の末に、大月氏、已に大夏を征服して其の地を奪ひ、更に北印度を併せ、廣大なる領土を有して、一大王國となれり。後漢の初に、迦膩色迦王、位に即き、深く佛教を信じ、五百人の高僧をカシミア(カシミール)に會し、第四回の三藏結集をなし、大に之を奨励せしかば、佛教の中心は、北印度に移り、次第に北方に傳播せり。
佛教の東流 佛教の支那に入りしは、後漢の明帝の時にして、恰も迦膩色迦王の時に當れり。明帝、蔡愔に命じて佛教を

佛教支那に
入る(七二
七)

印度に求めしめ、迦葉摩騰、竺法蘭の二僧を伴ひて歸り、洛陽に白馬寺を立てたり。其の後、西域諸國の僧侶、續々渡來して、翻譯又は布教に従事せしかば、佛教次第に隆盛となれり。朝鮮半島には、前秦の苻堅、僧順道を高麗に遣したる時、始めて傳來し、後、胡僧、摩羅難陀、百濟に傳教して、枕流王、之に歸依し、後、百六十餘年にして、聖明王、之を我が國に傳へたり。

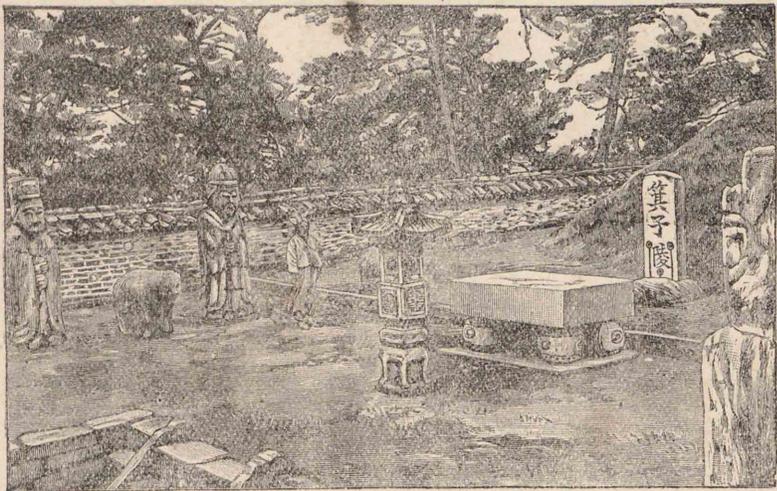
大正四年九月三日

箕氏(皇紀
前五五〇—
後四六七)
衛氏(四六
七—五五三)

第五 上代に於ける朝鮮半島及び其の我が國との關係

古朝鮮 曩に殷王紂の亡ぶるや、王族箕子、逃れて朝鮮に入り、其の王となれり。箕氏、相繼ぐこと四十一世、箕準に至り、燕人衛滿、國王箕準を逐ひ、自立して王となりしが、其の孫、衛右渠、屢、漢の命に抗せしかば、武帝、之を滅し、眞番(鴨綠江流域)、樂浪(大同江流域)を置き、古朝鮮の地は、遼河と大同江との間に、箕氏、衛氏、皆、王險(今平壤)に都せしが、武帝、王險を朝鮮縣と改め、樂浪郡の治所としたり。

古朝鮮
西大嶺江
大同江
箕子
衛子
燕代



箕子陵

平壤城北にありて圓形に築て、頭形をなす前左の石人石羊を立つ

臨屯(江原道)玄菟(咸鏡道)の四郡を置けり。古朝鮮の地は、遼河と大同江との間に、箕氏、衛氏、皆、王險(今平壤)に都せしが、武帝、王險を朝鮮縣と改め、樂浪郡の治所としたり。

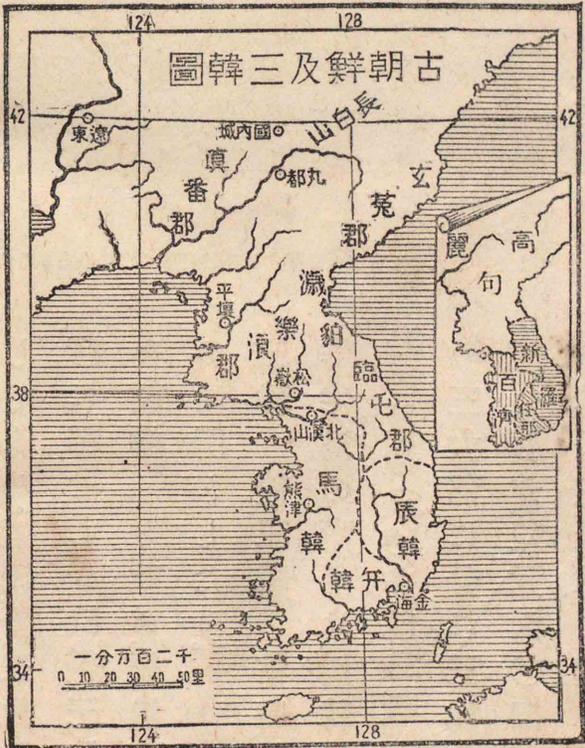
三韓 後三韓 當時朝鮮半島の南部は、馬韓(全羅道)辰韓(慶尙道)弁韓(慶尙南道)の三大部に分れ、三韓と稱せしが、紀元六〇四年、朴赫居正、辰韓に起り、金

上古史 上代に於ける朝鮮半島及び其の我が國との關係

朝鮮
道別名

新羅建國
(六〇四)

城(慶)に都して新羅國を立て、辰韓の故地を領し、後國號を雞林と改めたり。紀元六二四年、夫餘(滿洲)の人雛牟王(蒙朱)鴨綠江の上流に國を建て、高句麗と名づけたり。雛牟王の少子溫祚南下して馬韓の地を略有し、慰禮城(稷山縣)に都して百濟國を建て、三國鼎立の姿をなせり。之を後三韓、又、單に三韓といふ。



高句麗建國
(六二四)

百濟建國
(六四三)

三

任那、日本に交通す
(六二八)

任那の日本府 此の頃、もとの弁韓の地に、數多の小國ありしが、金首露といふもの、新に金海(江洛東)に據り、國を伽羅と號し、近隣の小國を従へたり。紀元六二八年、新羅と事を構へ、蘇那喝叱智を我が國に遣して、援を求めしかば、崇神天皇、鹽乘津彦をして、彼地を鎮めしめ給へり。是れ日本府の始なり。伽羅は、今の慶尙道の南部にして、後に、國號を任那と改めたり。朝鮮半島の征服 紀元八六〇年、神功皇后の新羅を征伐し給ふや、新羅王、出でて降り、年毎に綾羅錦絹八十艘を貢せんことを誓ひ、百濟亦、我が威風を望みて、歸服し、ついで高句麗も朝貢せしかば、朝鮮半島は、一時、全く我が國の版圖となれり。されど、高句麗は、土地遠隔なるを以て、交通自ら繁からず、新羅は、叛服常ならず、獨り百濟は、忠實に我が國に事へたり。

四

日本の新羅
征服(八六〇)

高麗王系圖

中古史

中古は、隋の一統より、宋の滅亡まで、凡そ六百餘年間を含む。隋唐三百餘年間は、大陸と我が國との公けの交通は、我が國の制度・文物は、概ね支那の影響を蒙らざるはなかりしが、唐衰ふるに及び、兩國間の交通、絶え、僅に商賈・僧侶の來往するに過ぎざりき。

第一 隋唐の一統

隋(二二四
一—二二七
八)
隋の一統
(二二四八)

一 隋の一統 隋の文帝、已に天下を一統し、大に意を内治に用ひ、賦役を輕減し、百姓を愛撫し、又諸般の制度を改定せしが、多く唐制修定の基礎となれり。文帝の子煬帝、父を弑して即位し、性、豪奢を好み、盛に土木を

一 運河
二 建築
三 外征

小野好吉

唐の建國
(二二七八)

興し、北は白河より南は錢塘に至れる大運河を開き、西、長安より東南、江都(江蘇省揚州)に至れる間に、離宮四十餘所を置き、遊覽を事とせり。

煬帝、又、外征を好み、林邑(今の暹羅)を伐ち、流求(今の臺灣)、吐谷渾(青海附近に居りし鮮卑)を征せしが、高句麗の征伐には、再三、失敗したり。

帝の土木と外征とは、人民の疲弊を來たし、怨嗟の聲、四方に起れり。時に李淵、太原に留守し、次子世民(李世民)の勸に従ひ、遂に兵を擧げて反し、長安を陥れて恭帝を立て、自ら政を執りしが、煬帝、先に江都に遊幸して、弑せられたり、尋いで李淵、恭帝の禪を受けて、帝位に即き、國號を建て、唐といふ。之を唐の高祖となす。隋は國を有つこと、三代、三十七年にして亡びぬ。

二 唐の創業 唐の高祖、隋の禪を受けて天子となり、子世民に傳へたり。之を太宗となす。太宗の世は、賢相に房玄齡(フウケンレイ)、杜如晦(トニョウカイ)

今日破家亦由汝
爲國赤由汝(唐
高祖)

房・杜
李靖・李勣

貞觀の治

あり、良將に李靖李勣あり、魏徵は顧問に參し、共に帝業を翼
賛せしかば、天下、太
平にして、四民、大に
安堵せり。之を貞觀
の治と云ふ。
太宗は、また外征の
師を興し、北は突厥
を亡し、鐵勒諸部を
降し、西は吐谷渾、吐
蕃より、南は印度を
破りしかば、唐の威
令、遠近に振へり。

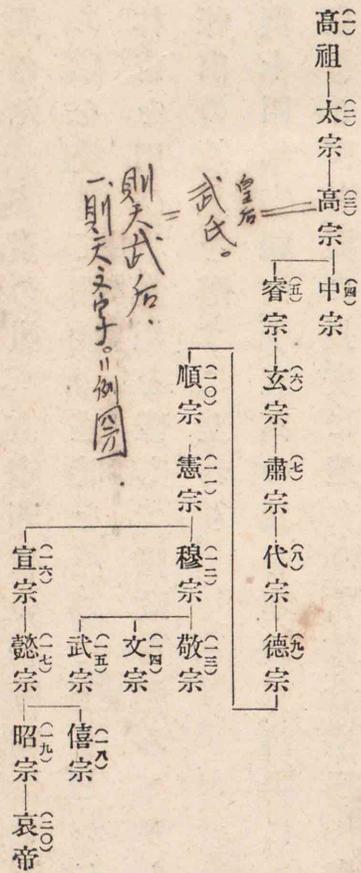
武韋の禍 高宗の世は、謀臣名將、なほ存し、唐の國威、未だ衰



周(二三三五)
〇一二三六
五)

へざりしが、高宗崩じて後、皇后武氏、中宗・睿宗を立てて、并び
に之を廢し、唐の宗族を殺して、自ら聖神皇帝と稱し、國號を
周と改めたり。已にして、張柬之は、武后の衰病に乘じ、中宗を
位に復せしめて唐室を復興せしが、皇后韋氏、中宗を弑して、
また國を亂したれば、睿宗の子隆基、韋氏を殺して父睿宗を
擁立し、尋いで其の後を襲へり。之を玄宗となす。

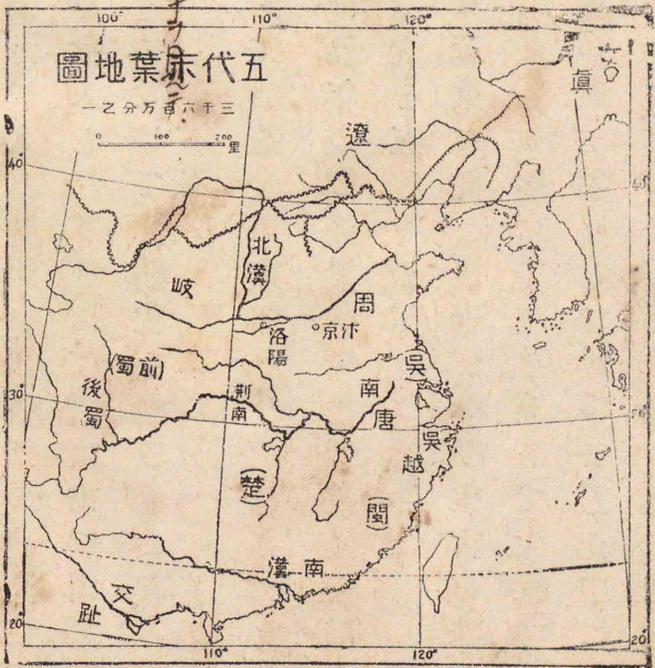
唐系圖



後唐(一五八三—一五九六)
後晉(一五九六—一六〇七)

後漢(一六〇七—一六一一)

敬塘契丹の援を得て、遂に後唐を滅し、都を大梁に遷したり。之を後晉の高祖となす。高祖、燕雲(今の直隸山西の北部)十六州を契丹に割與せしが、其の後嗣盟に叛きしかば、契丹の太宗大舉して、後晉を亡ぼし、大梁に都せり。已にして、太宗は、中國治め難しとし、三月にして北歸せしかば、晋の舊將劉知遠、自立して國を漢と號し、其の子隱帝は、其の將郭威に滅ぼされたり。郭威



後周(一六一一—一六一六)
宋の建國(一六一〇)

契丹の興起(一五七六)

渤海滅亡(一五八六)

遼の國號(一六〇七)

宋の一統(一六三九)

は、即ち後周の太祖なり。其の子世宗、大志あり、支那を一統せんと欲し、頻りに兵を南北に用ひしが、業半ばにして没し、恭帝立つに及び、節度使趙匡胤、後周を篡ひ、汴京に於て帝位に即けり。之を宋の太祖となす。
契丹 契丹は、南北朝の頃より、潢河(遼河の上流)附近に居り、夙に唐に臣事せしが、唐末、耶律阿保機、其の長となるに及び、帝と稱して、臨潢(潢河の上流沿岸)に都せり。之を契丹の太祖となす。太祖、悉く回紇の故地を占領し、更に渤海を伐ちて之を滅し、漸く南下して、支那の塞内に迫れり。太祖の子太宗、後晉を滅し、大梁に據り、國を遼と號し、幾ならずして北歸せしが、宋の初世に及び、屢、支那の北邊を侵せり。
宋の一統 初め、朱全忠の唐を滅すや、節度使の之に従はざる者、所在に國を建て、宋初に至りても、尙、楚、荆、南、後蜀、南漢、南

渤海の興起
契丹の興起
(一五七六)

趙普は、武官に殊に長けり。宋の太祖、天下を以て平定し、天下を以て太平に致し、陛下に致す。臣有論語一部、以平部佐太祖、定天下、以平部佐陛下、致太平。趙普

唐吳越北漢の七國あり、太祖及び其の弟太宗前後、之を征服せしかば、始めて一統の治を見るに至れり。太祖は賢相趙普を用ひ、唐末

鑄支元用

契丹文字
遼神册五年始
鑄て契丹文字
を以て行ふ
遼史による

以來、藩鎮の宿弊を矯めんとし、機會ある毎に、節度使を罷めて、文臣を任用し、以つて中央集權の實を完うせり。

遼の極盛 太宗、北邊を恢復せんとし、遼を征すること前後十餘年に及びしかども、終に成功せざりき、太宗崩じ、眞宗位を繼ぐに及び、遼の聖宗、大軍を率ゐて澶州(直隸省)の三面を圍みしかば、宋の宰相寇準は、眞宗に勸めて親征せしめ、兩國の天子、澶州城の内外に、相對峙せり。されど、眞宗、戰勝の望みな

きを知り、遂に兄弟の盟をなし、宋より歲幣、銀十萬兩、絹二十萬匹を遼に與へて、和睦を結びたり。遼の聖宗は、賢明にして

澶州の盟 (二六六四)

四

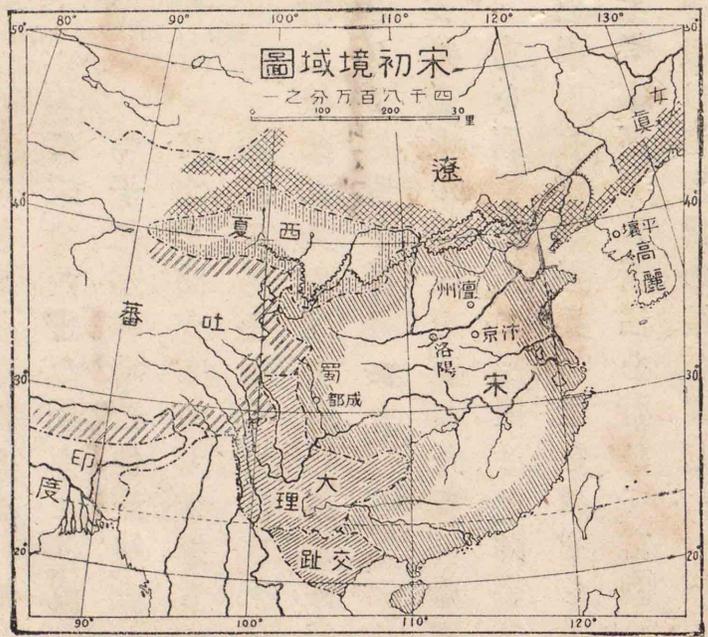
東洋史

六六

遼聖宗

五

内政治に勤め、外、宋と和し、高麗を征し、其の領土、東は日本海に瀕し、西は内外蒙古を包み、國內に五京を設け、朝貢するもの六十餘國に及びしが、聖宗崩じてより、國威漸く衰へたり。吐蕃の別種、党項は、唐の中世以後、夏州(鄯州)に蕃殖せしが、李元昊、長となるに及び、勢、強大となり、河西(黄河以西)を併せ、都を興慶(甘肅省)に奠め、自



中古史 五代と宋 遼金の廢興

六七

夏の國號 (一六九八)
 一、王安石
 二、均輸
 三、青苗
 四、市易
 五、保甲
 六、保馬



西夏文字 西夏李德明之
 作てり頌す行(遠史に)るよ標
 文な字

遼に歳幣銀絹各十萬を増し、後、又元昊の請を容れ、歳幣銀絹各二十五萬を贈ることとせしむ。封册を授けたり。
 神宗の新政 宋の斯く屢外交上の失敗を重ねたるは、藩鎮を廢絶するに急にして、兵力を弱くせしに起因せり。神宗之を憂へ、即位の後、王安石を擧用し、富國強兵の策を講ぜしめたり。安石、先づ青苗均輸募役市易等の新法を行ひて、富國の術を立て、保甲保馬の法を設けて、強兵の策を講じたり。然る

平生所爲未嘗有不可對人言者也(司馬光)
 新法黨と舊法黨
 元祐の更化
 改之當救拯拯溺也(司馬光)
 章惇
 紹聖の紹述

に、此の新法は、舊制習俗に反すること多く、之に伴ふ弊害亦少からず、加ふるに西夏交趾の征伐、意の如くならず、遼は反つて北邊を侵し、かば、多年の改新勤勞、更に功なく、神宗の崩後、朝廷には、常に政黨の紛争を見るに至れり。
 司馬光歐陽修蘇軾程顥等の名臣碩學は、新法を以て祖宗の遺訓に背くものとなし、初めより之に反對せしが、王安石は、悉く是等の反對黨を斥けたり。神宗崩じ、哲宗即位するに及び、宣仁太后、政を攝し、新法黨を斥け、司馬光等の舊法黨を用ひ、大政を委ねたり。之を元祐の更化といふ。然るに、司馬光相たること八月にして死し、舊法黨亦分れて相争ひしかば、漸く勢を失ひ、哲宗親政の時に至り、章惇等の新法黨復、朝廷に立てり。之を紹聖の紹述といふ。
 徽宗の世に至り、舊法黨再び用ひられしかど、政權は遂に新

蔡京

法黨蔡京の手に歸せり、徽宗奢侈を好み、藝術を奨励し、宮殿

を修築し、國庫漸く

窮乏せしかば、新法

を復して、暴斂を事

爲判也、夫美伏、夫見、本阜、史、
口爲、口季、業、艾、菟、免、赤、天、口伏、去、口本、阜、
史、題

字文眞女
希顏完祖太の金
ら作てじ命に尹
す行額を之めし
(るよに史金)

とし、國力益、疲弊したり。

七

金の國號
(二七七五)

金の興起 女眞、黑水靺鞨は、唐の末葉、渤海に屬し、渤海滅亡

の後、久しく遼に臣事せしが、完顔部の長阿骨打、全女眞を一

統して皇帝と稱し、都を會寧(吉林)に定め、國を金と號す。之を金

の太祖となす。遼の天祚(聖宗の玄孫)直に親征せしが、混同江(松花江)に戰

ひて大敗せり。宋、乃ち金と謀り、南北より遼を夾撃するの策

を立て、事成るの後、宋は遼の南部を得、從來、遼に贈りし歲幣

を金に與へんことを約せり。然るに、宋の童貫、南京(直隸省)を攻

めて勝つこと能はず、金、獨り頻りに遼軍を破り、遂に南京を

遼の滅亡
(二七八五)

陥れて遼を

滅せり。この

役、遼の天祚

金軍に虜に

せられ、其の

一族耶律大

石、餘衆を率

ゐて遠く西

に逃れ、中央

亞細亞に入

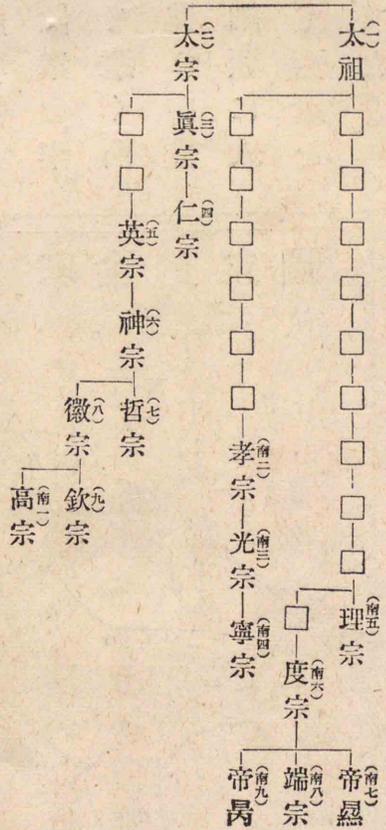
りて西遼を

建てたり。



己が美術、蔡京の好む所なり。

宋系圖



金、已に遼を滅して、其の大部を領し、宋は戦功なきを以て、既定の歳幣の外に、多くの金穀を與へ、僅に南京附近の地を得しが、太祖の子太宗、立つに及び、大舉して南下せり。徽宗、乃ち己を罪して、位を子欽宗に譲り、地を割き、歳幣を増して、一時和を結び、大に勤王の師を募りしかども、金軍、遂に汴京を陷

靖康の難
(二七八七)

れ、徽宗、欽宗、以下、宗戚男女三千餘人、皆執へられぬ。之を靖康の難と云ふ。

宋の南渡
(二七八七)
臨安(杭州府)
(二七八九)

八

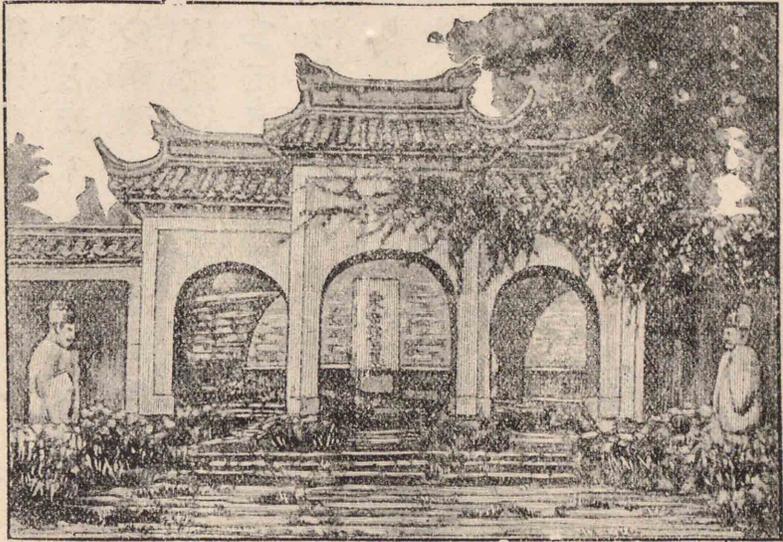
據山易撼岳家軍一難
不斬王倫國之存亡未可知也秦檜亦可斬也(胡銓)

宋金の和約
(一一八〇一)

九

金の盛時 宋の衰滅 金の太祖の孫迪古乃、都を燕京に遷

小堯舜

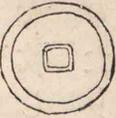


墓飛岳 許丈三リ周リ許丈一さ高の墳りあに畔の湖西府州杭省江浙 本圖は入口の門郭り玉は岳飛の謚號なり

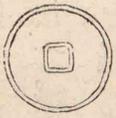
し、尋いで六十萬の大軍を率ゐて宋を攻め、采石(安徽省)に迫りしが、宋の將、虞允文に破られ、幾ばくならずして、内亂の爲に没したり。世宗、其の後を承け、英明の資を以て、内治の改革を勤め、奢侈文弱の風を矯め、小堯舜と稱せられぬ。時に宋の孝宗、亦賢明にして、銳意治を圖り、兩國交戦

を避けて和約を結び、宋は歲幣五萬を減じ、南北、休息すると三十餘年に及べり。

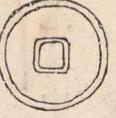
一 宋通元 貨幣



二 天贊元 貨幣



三 正隆元 錢



一 宋太祖 天贊元寶
二 宋太宗 天禧元寶
三 宋高宗 紹興元寶
宋太祖 天禧元寶
宋太宗 天禧元寶
宋高宗 紹興元寶

の後、金漸く衰へ、蒙古、漠北より起りて金を攻めしかば、宋の理宗、復讎の機到れりとなし、兵を遣し、蒙古を助けて金を滅

渤海入貢の始(一三八七)

入貢の期を定む(一四五八)

ざりき。仁明天皇の御代に至り、商賈の外、新羅人の我が國に入るを禁じ、新羅との交通は、全く絶えたり。渤海は、聖武天皇の御代、始めて我が國に入貢せしが、我が國よりも、使を遣して之に酬いたり。尋いで桓武天皇の御代、入貢の期を定めしが、其の衰亡するに及びて、滿洲との交通、全く絶えたり。支那との交通は、隋朝に開け、唐朝に至りて後、我が遣唐使、留學生の派遣、絶えず、支那政府の使節を始め、學者、僧侶、職工等の、我が國に來るもの、亦多かりしかば、支那の文物、技藝は、朝鮮半島を經由せずして、直接に我が國に傳來し、是より我が國の文化は、著しく進歩したり。中にも、大化以後の新政は、隋唐の制度に倣へる所、多かりき。

第四 唐宋の制度文物と我が國の文化

注喜恩七

一

隋唐の制度と大寶令 周代に起れる學術は、秦火に遇ひて一たび亡びたれども、漢に至りて再び盛となり、六朝(吳晉宋齊梁陳)の間、一時衰へたりしが、隋唐に至りて、蔚然として勃興せり。されば、制度の如きも、唐代に至りて大に完成したり。

三省六部

中央政府には、上に中書尙書門下の三省あり、中書省は詔勅を宣奉し、門下省は之を審査し、尙書省は二省の確定せし詔勅を天下に施行する所にして、其の權尤も重し。尙書の下に吏部(官吏の進退を掌る)戸部(戶籍收稅)禮部(儀式貢舉)兵部(軍)刑部(刑律)工部(工產)の六部あり、天下の行政を分掌せり。尙書の長官を尙書令といひ、其の副に左右僕射あり、左僕射は吏・戸・禮の三部、右僕射は兵・刑・工の三部を統べたり。我が國、二官八省の制は、これに則れるなり。

地方制度

地方制度は、國を十道に分ち、道の下に州と縣とあり。州には

出まき
司馬行政の事
下に大司馬あり
支那の故
貢賦
又地方の官吏は
えらばるなり
僕射官
右の三
吏部
戸部
禮部
兵部
刑部
工部

田制

刺史、縣には令をおきて、民治を掌らしめたり。我が國、畿内八道の區分、國司郡司の制は、これに倣へるなり。

田制は、周代井田の意に倣ひて均田法を定め、十八歳以上の男子には、官田百畝を給したり。百畝毎に、粟二斛を貢せしむるを租といひ、丁男の毎年二十日間、公役に服するを庸といひ、方物を納めしむるを調といへり。我が班田收授法は、均田法を適用せるものにして、租庸調の制も、殆ど唐に同じ。

兵制は、十道を通じて六百三十四の折衝府をおき、各八百人乃至千二百人の兵を備へ、兵役年限は二十歳より六十歳までにして、丁男の三分の一を徴し、交番に帝城を宿衛せしむ。我が軍團の制も、略相似たり。

學制は、京師に國子學、大學、四門學等、すべて六學あり、地方に、各學校を設く。毎年生徒(學校出頭者)郷貢(州縣の試験に及第せるもの)を尙書省に會し、

學制

國子學

大學

四門學

兵制

國子學、大學、四門學、
五品の子弟を
定員二百五十人
文官の子弟を
定員二百五十人
武官の子弟を
定員二百五十人

律學

書

算

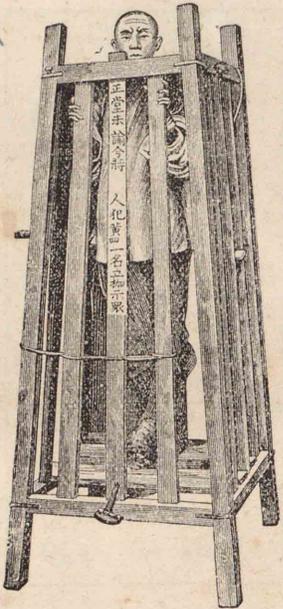
各酒、
定員三百人

定員三百人

定員三百人

玄奘・義淨

明經進士の考試をなして、官吏に登庸せり。刑罰には、笞杖徒流死の五刑あり、笞杖徒各五等、流三等、死二等、合せて二十等あり。我が國の學制、兵制、刑法より家屋衣服の制に至るまで、概ね唐の制に據らざるものなし。



支那の罪人の刑具
法に懲らしめたる人
を人刑にせしむるに
用ゐるものなり

宗教 佛教は、後漢の明帝の世に、始めて支那に入り、六朝の頃益々隆盛に赴き、晋の法

顯は印度に入り、印度の達磨は支那に來りて、禪宗を傳へ、唐代には、玄奘及び其の弟子義淨、相ついで印度に至り、經論を求めて歸り、多くの宗派も、支那に傳來したり。鳩摩羅什の三論宗、智者大師の天台宗を初とし、玄奘の法相宗、印度の僧金

佛教八宗

剛智の眞言宗等、盛に行はれしが、三論宗は、高麗の僧惠灌、之を我が國に傳へ、法相宗は、我が僧道昭、玄奘に就き學びて之を傳へ、華嚴宗は、慈訓、律宗は、唐の僧鑒眞、天台宗は、最澄、眞言宗は、空海、之を我が國に傳へ、俱舍、成實の二宗も、この前後に傳來したり。



玄奘法師 天竺 圖天渡 年三觀貞 印中七 百六本 新てし對に書譯の什羅摩鳩を譯ふ云と譯

榮西・道元

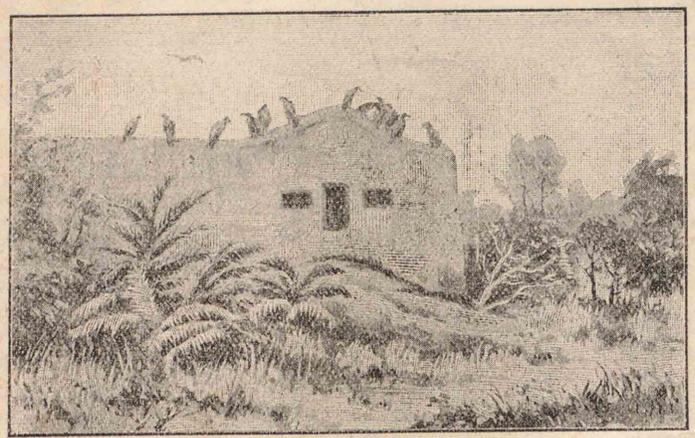
道隆 榮西・道元 からざりき。中にも、僧奮然は、宋に入りて、太宗より紫衣を賜はり、榮西は孝宗より千光大法師の號を賜はり、榮西の門人道元も宋に學びて歸り、宋の僧道隆は、我に歸化し、並びに禪宗を我に傳へたり。

道教 祖仙の術 佛敎の教

道教

道教は、神仙の術に道家の説を附會したるに起り、老子を仰いで祖とせり。西晋以後、漸く盛となりしが、唐の帝王は、老子を國祖とし、諸州に廟を立て、崇敬、甚だ厚かりしかば、道教の隆盛、其の極に達したり。

祇教



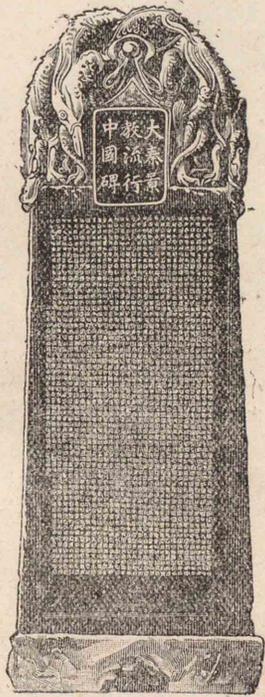
墳の(教火事) 教祇るにあにイベンボ度印は圖本 地墓の教祇 アユチルヴめ収に内塔の蓋無を骸死りな (ふいと塔の寂靜) 墓りよに水雨は骨骸めしは食を肉の其てしを鳥るへいと (Valture) むして出れ流に下塔てりは傳を講

祇教は、又、事火教といひ、上古、ペルシア人ゾロアステルZoroasterの創始に係り、明暗の二神を立て、明の神を崇敬するなり。南北朝の頃、支那に入りしが、唐の初め、長安に

景教傳來
(一一二九五)

祇神の祠を立てたり。

景教は、基督教の一派にして、シリア人ネストリウスMoslemsの唱へたるものなり。我が紀元一千年代に、羅馬國內より放逐せられしが、其の徒、ペルシア・印度・中アジア地方に布教したれば、

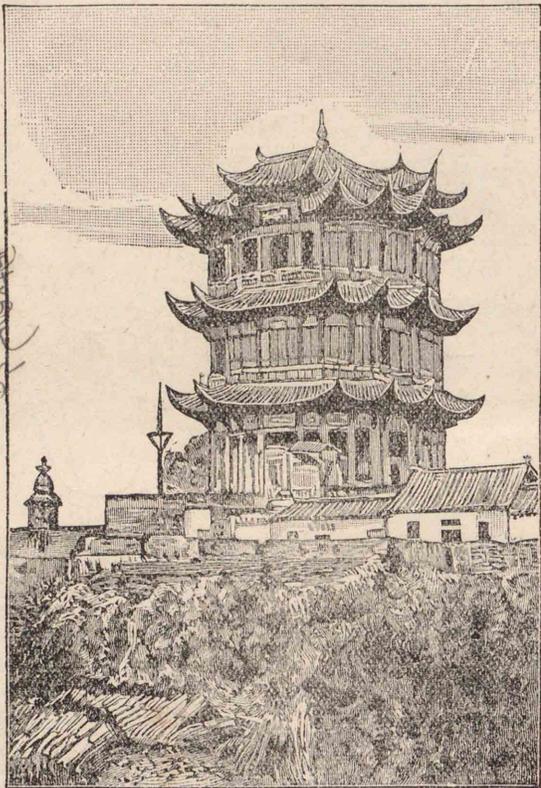


大秦景教流行中國碑
西陝省安西府西門外崇仁寺
淨撰文一丈五尺高凡二年中建
後方に建年二建中

羅本ロ本と云へるもの、之を支那に傳へたり。實に、我が紀元一二九五年なり。
唐宋の儒學・文藝 晋朝以後は、古註に従ひて、經文を解する

訓詁註
疏の學

ことを力め、唐の太宗、孔穎達等に命じて五經の疏註を作らしめしより、儒者は、専ら訓詁註疏を事とせしが、宋代に至り、儒



黃鶴樓 唐代建築の好例なり前年有鳥にせはる惜
むべし穎顯の詩に曰く 昔人已乘白雲去 此地空餘黃鶴樓

其の開祖は周敦頤にして張載・程顥・程頤、この説を廓め、朱熹に至りて之を大成せり。朱熹と同時代に陸九淵出で、宋學に

學は、前代未發の蘊奥を極めて、宋學の名を古今に擅にせり。之を性理學、又、理學といふ。

青年易老學難成
一寸光陰不可輕
(朱熹)

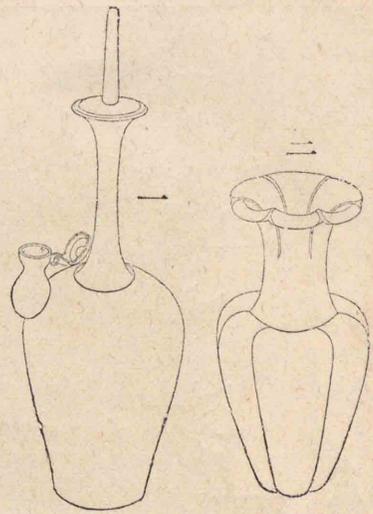
徳の時代
程顥程頤

中古史 唐宋の制度文物と我が國の文化

六朝の文學

反對して、徳性心悟を主とし、自ら一派を立てたり。六朝の頃、學藝は一般に衰へ、詩文は字句を飾ることのみを勤め、四六駢儷の體を生ぜしが、唐の世に、李

唐詩文
唐詩遷
李杜
三體詩
古文
先帝每詔卿(蘇軾)文章曰奇才(英宗后)



瓶の唐漢
度化影の響を受けるため見るに用しに印
漢瓶高五寸三分 腹圓九寸七分
唐瓶高一寸二分 腹圓一尺七分

愈の文は、唐代の第一なるのみならず、支那の古今を通じて第一たり。唐代の文章は五代に至りて、一時衰へたりしが、宋の初、歐陽修(字は永叔)出でて、古文を復興して、新生面を開き、蘇洵(字は明允、老蘇)

軾(字は子瞻、東坡と號す)蘇轍(字は子由)曾鞏(字は子固)王安石(字は介甫)相尋いで出で、一代の大家と稱せられ、唐の韓愈(字は退之)柳宗元(字は厚之)と合せて世に唐宋

唐宋八大家
韓愈
柳宗元
蘇軾
蘇轍
曾鞏
王安石



圖較比樣
唐鏡(一) 雙鳳と馬兩ををと描き
唐草樣模(即ち葡萄蔓)を以て飾りせりと
(二) 孝謙天皇御正倉院物な紋樣の草唐は
は唐鏡と酷似せ葡萄蔓は西アによれ傳る
に本日本支の化文の西アを以て釋音のトボてに
しべる見をるせ響影

唐宋八大家
宋代の詩人

八大家と云ふ。歐陽修・蘇軾は、又、非凡の詩才を具へ、梅堯臣・黃庭堅と共に、宋代詩人の巨擘と稱せらる。宋末、節義を以て著はれたる文天祥・謝枋得も、亦、文に巧みなりき。

中古史 唐宋の制度文物と我が國の文化

宋

東洋史

日本書紀(後代)の(大)人(書)え(柳)澤(平)家

九〇

能書家

唐代には、能書家輩出し、歐陽詢、顏真卿、柳公權、尤も著はれ、宋代に至りて、米芾、蔡襄の二人、群を抜けり。

畫家

繪畫は、六朝以來、佛教の隆盛に伴ひて發達し、吳道玄の佛畫、李思訓、王維の山水畫、尤も著はれ、宋代は徽宗の保護によりて大に發達し、李龍眠、名を後代に擅にし、徽宗も、亦、丹青に堪能なりき。

南文作
南北西を
フ併合ス。

印刷術

印刷の法は、隋代に始まり、宋代に至りて、其の業、益、盛にして、其の刊行に係る古經は、後世の典據となり、世に、これを宋版といふ。

四

我が國の文藝 我が國、王朝時代に於ては、漢文學、盛に起り、詩は李白、杜甫、白居易、樂天を學び、文は漢唐に倣ひ、美術、工藝の如きも、唐代の影響を蒙ること、少からず、巨勢金岡の如きは、吳道玄の流を汲める者に似たり。

唐代の畫風

宋代の畫風

又宋代の畫風は、室町時代の初めより、我が國に入り、畫界に一大革新を與へたり。

唐宗
唐宋八家
韓退之
柳宗元

中古史 唐宋の制度文物と我が國の文化

九一

近古史

近古は、元・明二朝を含み、約四百年間に亘れり。此の間、支那朝鮮と我が國との交際、尤も繁く、前には、我に文永・弘安の二役あり、彼に倭寇の沿海に出没するあり、後には豊臣秀吉、征韓の事あり、日・明・朝鮮、三國の軍、朝鮮半島に相馳逐せり。されど、徳川家康、征夷大將軍となるに及び、平和を主とし、大陸と我が國との關係は、再び親密となれり。

第一 蒙古人の興起 元の建國 東西の交通

乃蠻平定
(一八六四)

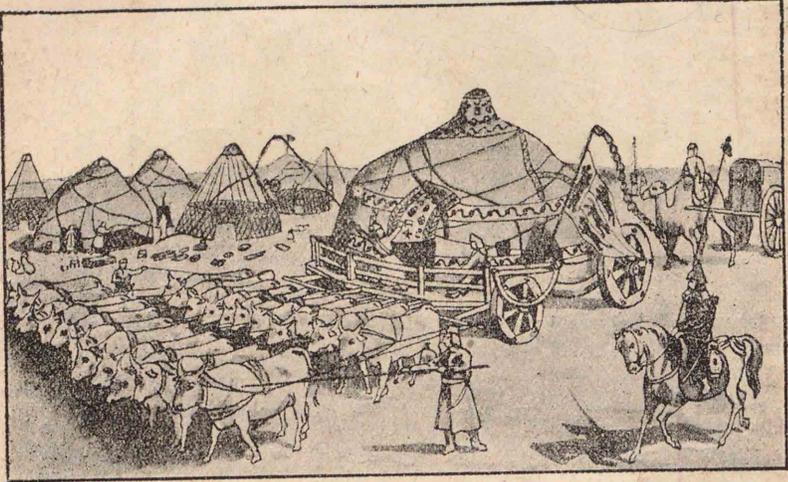
一 成吉思汗 蒙古部は、オノン河と、ケルレン河との間に在りて、世遼・金に臣事せしが、鐵木眞部長となるに及び、近傍の諸部落を併せ、阿爾泰山附近にありし乃蠻部長、太陽汗を滅し

大連市金剛山
乃蠻部
成吉思汗の
即位地

成吉思汗即位
(一八六六)

西遼(一七八五-一七二)

屈出律敗死



蒙古人の住宅一定の定一は蒙古人古蒙古 蒙古人の住宅一定の定一は蒙古人古蒙古
本圖は十二頭の牛を以てしを舎屋を牽くものなり

て、悉く内蒙古を併せ、遂に推されて大汗の位に即き、成吉思汗(強盛なる君主の義なり)と號せり。元の太祖、是なり。尋いで、西夏を降し、金を破つて、河北の地を割かしめたり。
是より先き、北宋の末、遼の耶律大石、中央亞細亞を領して、西遼國を立て、都を虎思幹兒(吹河の上流)に奠め、(一八五七)今の新疆の大部を併せ領せしが、其の孫、直魯克の時、乃蠻の王子、屈出律、太祖に逐はれて來奔し、

太祖西征
(一八七九
一八八八
五)

サマルカン
下陥落(一
八七九)



古蒙の古蒙 士兵は人古蒙 乗騎は慣れに歳八に能てし
馬に野り獸捕をせ本圖はローボ、紀行より
轉載せるもの時當の俗風を見ゆるし

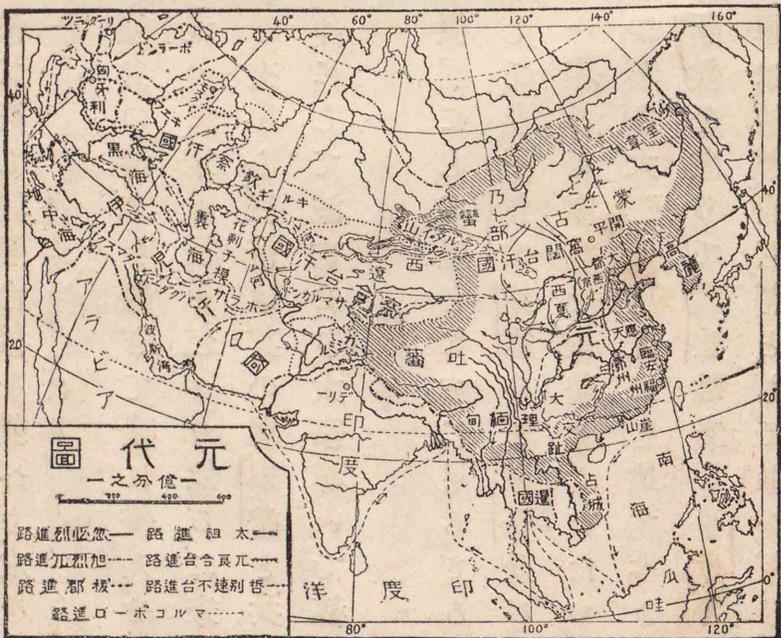
尋思干(今のサマ)を陥れ

西遼を滅し勢に乗じて舊業を復せんとせしかば、太祖哲別をして之を平げしめ、ここにホラズム國と境を接するに至れり。
太祖の西征 **ホラズム**の王家は、もと突厥族にして、**セルジク**王家に隸せしが、後、獨立して主家を仆し、**ムハメッド**王出づるに及び、**屈出律**を助けて其の志をなさしめ、其の報酬として中央亞細亞を領し、國勢漸く盛なりき。已にして、**ムハメッド**、蒙古を侮りて其の使者を殺したれば、太祖、其の四子**朮赤**、**察合台**、**窩闊台**、**拖雷**等を率ゐて西征し、先づ國都**シカバ**、**ムハメッド**王は、裏海の一島に逃

ムハメッド
王の死(一
八八一)

カルカ河上
の戦(一八
八三)
西夏の滅亡
(一八八七)

れて死し、王子、**札蘭丁**は、印度に走れり。太祖、**札蘭丁**を追ひて、印度に攻め入り、**哲別**、**速不台**の二將をして、**太和嶺**(今の**カフ**を越え、**露西亞**に侵入せしめ、大に露西亞諸侯の同盟軍を**カルカ**河上に破り、**南露西亞**を定めたり。太祖、西征七年にして、**西夏**を亡し、更に金を攻めんとせしが、



近古史 蒙古人の興起 元の建國 東西の交通

拔都

太祖の死
(二八八七)

六盤山(甘肅)に至り、病を獲て死し、窩濶台ウクルタウ後を襲へり。之を太宗となす。

三

太宗即位
(二八八九)

金の滅亡 太宗即位の後、父の遺志を繼ぎて金に侵入せしが、金の哀宗、蔡州(河南)に走りて、宋の援を乞へり。然るに、宋は、反つて蒙古と通じて金を夾撃し、哀帝は、其の嗣、末帝と共に、軍中に死し、金は百二十年にして滅亡せり。太宗、尋いで、都をハラホリムKharkorumに遷したり。

金の滅亡
(二八九四)

四

拔都の西征
(二八九六)

拔都の西征 太宗、宋の微弱にして患となすに足らざるを知り、兄、朮赤の子、拔都をして、皇子、貴由、拖雷の子、蒙哥及び老将、速不台等と共に、大軍を率ゐて歐洲を侵略せしめたり。拔都の西征は、アレクサンドル大王の東征にも比すべき壯舉にして、まづ露西亞の諸侯を破りて、欽察地方を平げ、キエフKyivに至りて軍を分ち、一軍は、拔都自ら將として、ホンガリアHungaria

大祖の西征
拔都の西征
太宗即位
金の滅亡

リーグニッ
ツの戦(一
九〇一)

五

に入り、大に敵軍を破りて、ペスト城を降し、一軍は、ポーランドを経てシレシアに入り、獨逸・波蘭の連合軍をリーグニッツに破りて、本軍に合せり。

欽察汗國 會、太宗の計音到り、全軍を收めて凱旋せしが、拔都、獨り留りてヨーロッパの地を鎮め、サライに都せり。是より、拔都の子孫、世々ここに居りてヨーロッパの地を領すること二百餘年に及べり。欽察汗國、又は金黨國といへるもの、是なり。

六

定宗即位
(二九〇六)
憲宗即位
(二九一一)

憲宗の即位 旭烈兀の西征 太宗の後、其の子、貴由、立ちて定宗と稱せしが、三年にして死し、拖雷の子、蒙哥、推されて其の後を襲へり。之を憲宗となす。憲宗即位の後、弟、旭烈兀をして、ペルシアを征せしめ、忽必烈をして大理國を平げしめたり。

アッバス朝
亡ぶ(一九一八)

大理國亡ぶ
(一九一三)

憲宗の死
(一九一九)

忽必烈即位
(一九二〇)

元の國號
(一九二二)



忽必烈 那支の彫刻に據るものならん
忽必烈、コロボ、紀行所載

旭烈兀は、先づバグダードを陥れて、アッバス王朝を倒し、又、小亞細亞諸國を攻め降して朝貢せしめ、都をタブリーズに定めて、伊兒汗國を建てたり。

元の太祖 宋の滅亡 忽必烈は、先づ雲南に入りて大理國王を降し、吐蕃を服し、別軍をして交趾を攻めしめしが、宋は、賈似道權を專にし、國勢日に衰へしかば、憲宗自ら將として忽必烈を助けんとし、宋に侵入せしが、不幸にして陣中に死せり。已にして和林の諸將、喪に乗じて阿里不哥を立てんとせしかば、忽必烈、急に宋と和して、北に歸り、開平に至りて即位せり。後、都を燕京に遷し、至元と開元し、後、又國號を建

臨安陷落
(一九二六)
崖山の役
(一九二九)

人生自^レ古誰無^レ死
留^二取丹心^一、照^二汗青^一
(文天祥)

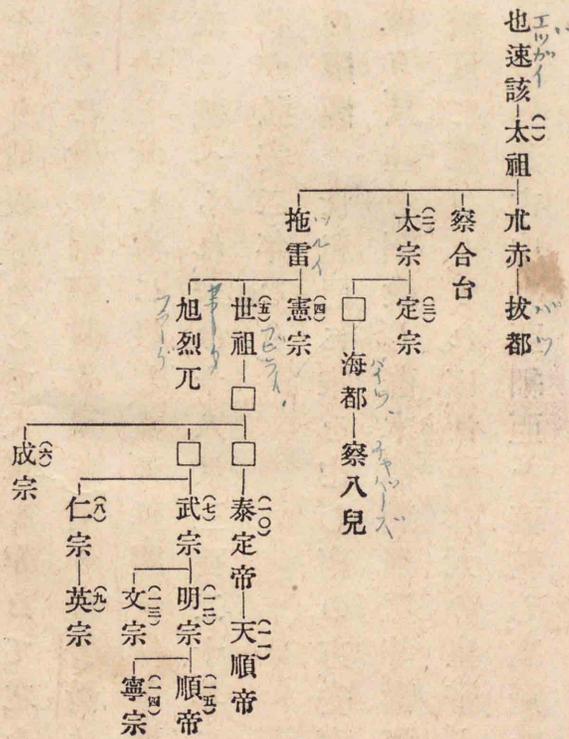
四大汗國

て、元と云へり。之を元の世祖となす。其の後、忽必烈、宋の背信を怒り、伯顔等をして大軍を率ゐて之を攻めしめしが、宋軍、連りに敗れ、國都臨安、遂に陥り、後、帝昺は、崖山(廣東省)に逃れ、陸秀夫と共に海に投じ、文天祥、張世傑等、勤王の士、或は自殺し、或は執へられ、宋は十八世三百二十年にして亡びたり。時に我が弘安二年なり。

元の版圖 世祖、已に宋を亡し、南の方、安南、緬甸を降し、占城を破り、爪哇を招致し、蘇木都刺、暹羅等、南海諸國も、亦概ね元の威風に靡けり。されば、世祖は、元の皇帝としては、支那本部遼東、内外蒙古、中央亞細亞を直轄し、高麗、吐蕃、印度、南洋諸國を服屬し、名義上、察合台汗國(中央亞細亞地方)、窩闊臺汗國(西部蒙古、阿爾泰山附近)、欽察汗國(西伯利亞、西半部及歐洲東部)、伊兒汗國(西方亞細亞、一帶、阿姆河以西)の四大國及び宗室諸王の私領地を統轄し、版圖の廣大なること、前古に比類なく、元

の隆盛、其の極に達したり。

元系圖



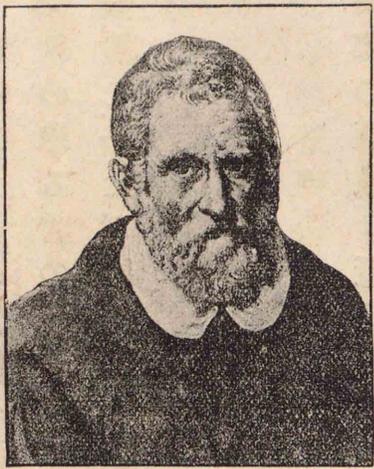
九

東西の交通

斯く、元の版圖は、歐亞の二大洲に跨りしかば、

元
文
三
一
七
年
後
七
月
東
方
見
聞
錄
著
し
て
日
本
の
富
饒
を
西
歐
に
紹
介
し
た
り
。

マルコ・ポ
ロ旅行
(一九三一
—一九五
五)



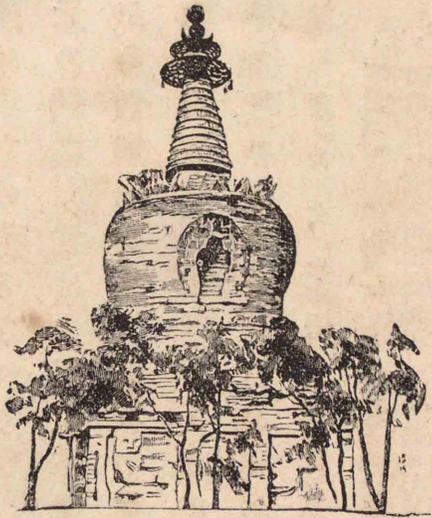
ローボ、コルマ

、コルマ 像畫の藏所館術美のマーロ
發を利太以年一七二一紀西はローボ
・ズーリプタ・アニメルア・アリシ
し達に京燕年五七二一經を淡沙比
州泉年二九二一れらせ任信に烈必忽
オのアシルベ後の年二海航し帆出を
ネベ里鄉年五九二一し陸上にズマル
捕に戦のとパノエツ年同り歸にアチ
し國歸てれき免年九九二一りなと隣
一十七年す死年四二三一

海陸に於ける東西の交通、大に開け、泉州(福建)の如きは、當時第一の貿易港にして、外商の寄寓するもの、萬を以て數ふるに至れり。且つ、太祖を始め、歴代の帝王は、人を任ずるに種族の差別を問はずりしかば、亞刺比亞波斯の學者技師、佛蘭西、以太利の畫家職工等、陸續來りて、元の朝廷に事へたり。中にも、以太利人マルコ・ポーロは、元に留まること十七年に及び、歸國の後、東方見聞錄を著して、日本の富饒を西歐に紹介したり。

權臣跋扈

襲を認めざるを以て、帝位の繼承毎に、紛争を免れず、權臣との間に立ちて擁立の

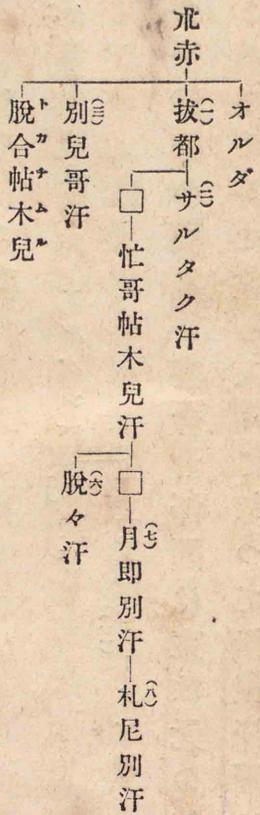


喇嘛塔 煉瓦及泥を以て築造し、下段の燕根の如き所の(四の周)には多の佛像を、塔の輪は段上を据え、塔の如き形をなして頂上を印の度りなもるせ因起に塔塔卒

元の滅亡
(二〇二七)

徐達常遇春をして燕京を攻めしめしかば、順帝は開平に奔れり。元は、八十九年にして亡びぬ。

欽察汗系圖



三

欽察汗國
(一九〇二—二一四〇)
月即別汗の即位(一九七三)
モスクバ太公の初(一九八八)

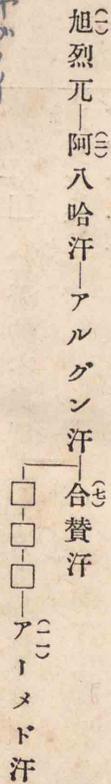
欽察汗國の盛衰 元朝の漸く衰微せる時に方り、西藩の三汗國も、亦衰へたり。欽察汗國は、拔都の後、屢、西隣のキリスト教國を攻めしが、旭烈兀のバグダードを亡すに及び、埃及の سلطان と使を通じ、兵を出して、伊兒汗國を攻めしかば、二汗、是より相敵視せり。後、數代を経て、月即別汗、立つに及び、モスクバ侯イバン一世に、太公の位を授け、露西亞の諸侯を統べ、蒙古人に代りて租税の徴收を監督せしめたり。月即別汗

札尼別汗の死(二〇一七)

伊兒汗建國(二九一八)

の子札尼別汗死して後は、篡弒相つき、國內大に亂れたり。
伊兒汗國の盛衰 伊兒汗國は、旭烈兀、東羅馬と好を通じて、
埃及のスルタンと戦ひ、其の子阿八哈は、キリスト教徒を保
護し、東羅馬皇帝の女を娶り、又、英、佛諸國と使聘を通じたり。
阿八哈の孫合贊汗は、ムハメッド教に歸依したれども、キリス
ト教猶太教を苦しめず、制度を定め、文教を興して賢君と稱
せられしが、其の死後、間もなく、内亂起り、國勢次第に衰へた
り。

伊兒汗系圖



察合台汗國の衰亂 察合台汗國は、東は元の仁宗に破られ、
西はホラサンに攻め入りて、却つて伊兒汗國に破られしが、

五

モスクー

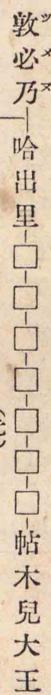
帖木兒のサマルカンド

帖木兒の第二回欽察汗國侵入(二〇五五)

オスマン

その後、叛亂相つき、諸酋長、割據して、各勢を振へり。

帖木兒大王の崛起 斯く三汗國の衰亂せる時に方り、帖木兒といへる希代の英雄、察合台汗國より起り、潰亂せる蒙古帝國の諸部を定め、再び蒙古大帝國を建てたり。帖木兒は、先づ國內の叛亂を平げてサマルカンドに都し、尋いで伊兒汗國を降し、前後二回、欽察汗國に攻め入り、モスクバを侵して歸れり。それより、鋒を轉じて印度に向ひ、疾風の如く、其の首都德里に攻め入りたり。



帖木兒大王の西征 會、オスマン帝國の王バチャジッド一世、コンスタンチノブルを圍むこと急なりしかば、東羅馬皇帝、使を帖木兒に遣して救を請へり。帖木兒、急ぎて印度より歸り、

天無二日、地不可有二王 (帖木兒)

近古史 元の衰滅 諸汗國の盛衰 帖木兒大王の業

アンゴラの戦(二〇六)

二〇五(オトランニテ死ス) 二〇六(オトランニテ死ス) 子ハムーンノ事ナリ

バチヤジッドとアンゴラに戦ひ、大に之を破り、終に王を擒にしたり。其の後、帖木兒、明を征服せんとし、大舉して東に進みしが、途に疾を獲て死し、大國忽ち瓦解したり。時に明の永樂三年、我が應永十二年なり。

八

オスマンリ、トルコの建國元の太祖、西征の時、メルフの近傍に住める突厥の一部族は、難を避けて小亞細亞地方に走り、コニアの臣となりし



オスマン建國(一九五九)



中亞細亞のアジア中央の大王大墓の形に於てドムハムドの寺院形式

チノプルに迫らんとせしが、帖木兒の來襲に遇ひて、志を果すこと能はざりき。されど、其の後、間もなく、國勢を恢復し、バチヤジッドの曾孫ムハメッド二世に至り、終にコンスタンチノブルを陥れ、東羅馬帝國を亡して、都をここに奠め、スレイマン

近古史 元の衰滅 諸汗國の盛衰 帖木兒大王の業

一世の時に至り、強盛を極めたり。今のトルコ帝國是なり。

土耳其帝系圖

オスマン一世—ウルカン—ムラッド一世—バチャジッド一世—ムハマド一世—

「ムラッド二世—ムハマド二世—バチャジッド二世—セリム一世—

「スレイマン一世—セリム二世—

第三 明の盛衰

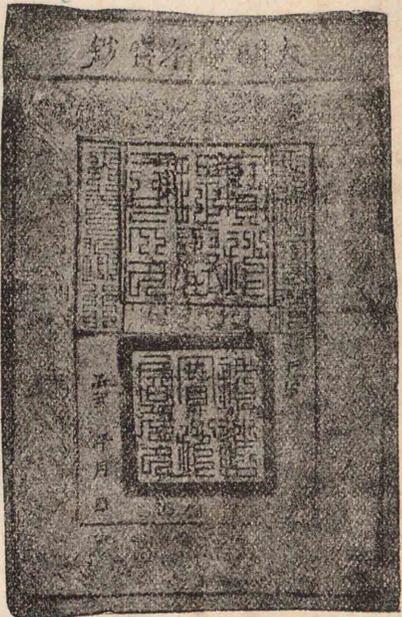
明の創業 朱元璋已に部將をして元の順帝を追はしむるや、帝位に金陵(江蘇省江寧府)に即き、國を明と號し、洪武と改元せり。之を明の太祖となす。太祖、専ら意を内治に用ひ、元代の胡俗を禁じて衣冠を唐代に復し、大明律を制定し、官制六部を復し、府州縣に學校を興して教育を奨勵せしかば、文物粲然とし

洪武帝(世元) 一

明(二〇二八—二二三三)

胡惟庸の任事

胡惟庸の任事 胡惟庸、明の初、丞相を兼ね、専ら意を内治に用ひ、元代の胡俗を禁じて衣冠を唐代に復し、大明律を制定し、官制六部を復し、府州縣に學校を興して教育を奨勵せしかば、文物粲然とし



明の紙幣 洪武年間發行せるもの 長一尺一寸 幅七分二厘

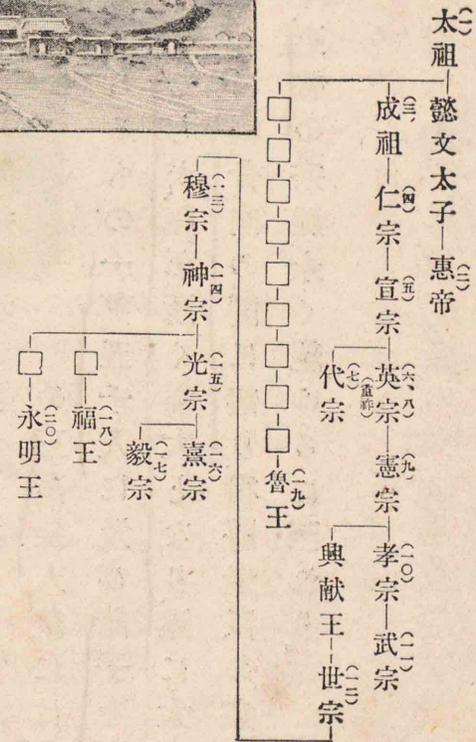
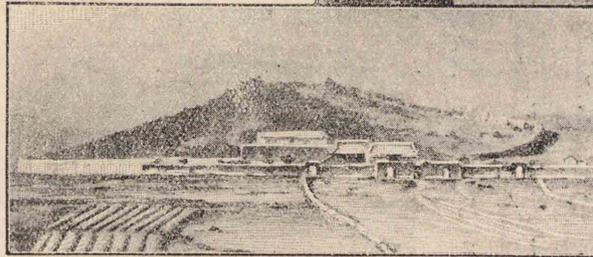
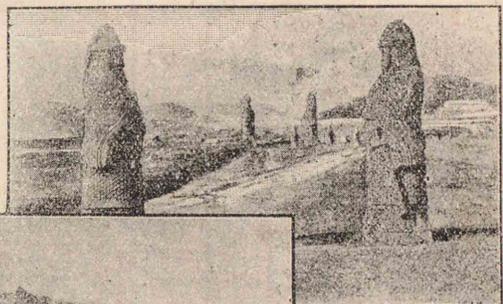
玉の獄を起し、刑せらるるもの一萬五千人に及び、諸子を要地に封じて藩屏となししが、諸王、漸く強大となり、遂に太祖崩じて二年ならざるに、禍、骨肉の間に起り、宿將老臣の宗室を助くるものなく、惠帝の宗祀、永く絶ゆるに至れり。

明系圖

見... 東洋史 一二三

成祖の篡立 (二〇六二)

明孝陵及其石像
明太祖陵 南京東北約
一里鐘山麓にあり前陵
兩側に石像を立つ



成祖の篡立 外征 太祖の孫、惠帝立つや、諸王の強大を恐れ、これを抑へたりしかば、燕王棣先づ兵を燕京に擧げ、君側を清むるを名とし、自ら靖難の師と號し、諸王を

胡季整擒にせらる (二〇六七)

瓦剌親征 (二〇七四)

誘ひて南侵せり。金陵の宦官等、燕王に通ぜしかば、惠帝防ぐこと能はずして出奔し、燕王自立して帝位に即けり。之を成祖となす。成祖、都を燕京に遷して、北京と改め、舊都を南京とせり。

成祖は、安南の内亂あるに乗じ、之を征して胡季整父子を擒にし、其の地を取りて、交趾布政司を置きたり。又、宦官鄭和に命じ、南海諸國を歴訪せしめしが、鄭和は、七たび使を奉じ、三たび君長を擒にせしかば、南海諸國、明の威徳に畏れ、占城、眞臘より暹羅、マラッカ、渤泥、爪哇、スマトラ、印度、錫蘭等の三十餘國、朝貢せり。

此の時、元帝の後裔、猶漠北にありて韃靼、可汗と稱し、屢北邊を侵ししかば、成祖親征して之をオノン河上に撃破し、更に瓦剌(元代の斡亦剌部)を親征して、土拉河畔に破れり。

三 明の中世

明の太祖、歴代の弊に懲り、宦官の政務に干預するを禁ぜしが、成祖、篡立の後、其の内應を徳とし、之を信任せしかば、宦官、漸く政權を擅にし、英宗以後、武宗の世に至る迄、常に朝廷に跋扈し、韃靼、瓦剌、この機に乗じて、屢、邊境に寇せり。

瓦剌は、蒙古の衰微に乗じて、次第に勢を張り、天山北路及び外蒙古の西半を領し、也先、部長となるに及び、元の遺族を奉じて、明に入寇せり。英宗、宦官、王振の勸に従ひ、五十萬の兵を率ゐて、土木（直隸）に親征せしが、反つて大敗し、敵に虜にせられ、僅に和議を約して放還せらるゝを得たり。其の後、也先は、内亂に倒れ、瓦剌、次第に衰へ、韃靼之に代りて勢を得たり。韃靼は、元の順帝九世の孫達延、其の長となりてより、内外蒙古を併領し、大元大可汗と號し、其の孫俺答に至りて、屢、明に入

土木親征
(一一〇九)

達延、韃靼
可汗となる
(一一三〇)

寇したり。

是より先き、武宗、群小を愛し、宦官を親昵せしかば、百姓、怨嗟し、盜賊、所在に起り、諸王の反する者、亦、少からざりき。名儒王守仁、寧王宸濠の亂を平げて、一時、小康を得たりしかども、国力、是より疲弊して、復、振ふこと能はず、世宗の時、大禮の紛議を生じ、多く朝臣を罰せしかば、政務澁滞し、益、明室の衰微を促したり。

大禮の紛議
起る(一一一
八四)

明の衰亡

神宗の時、顧憲成、東林書院を再興して同志を糾合し、朝政を是非せり。世に東林黨といふ。東林黨、梃擊、紅丸、移宮の三案を提げて、廷臣を駁撃し、熹宗の時、一たび用ひられしが、宦官魏忠賢、政柄を執るに及び、東林黨を斥けて殺戮を恣にし、朝政大に弛び、國民の疲弊、其の極に達し、流賊、諸方に起れり。中にも、李自成は、江北一帶の地を侵し、遂に北京を陷

東林書院
三案

四

明の滅亡
(一一三〇四)

近古史 明の盛衰

東洋史の關係
一六

れ、毅宗自ら縊れて崩じ、明室爲に覆滅したり。

第四 我が國と支那・朝鮮との關係

高麗と元 高麗は、世々遼金に臣事せしが、蒙古起るに及び、
屢其の侵伐を蒙り、世祖の時、終に元に降り、忠烈王は、世祖の
女を迎へて妃とせり。是より、歴代、元と婚を通じ、高麗よりは、
質子を元に送り、内治外交、凡べて元の命を奉じ、其の王の、燕
京に客遊して還らざるものさへありき。

元と我が國 世祖は、父祖の威を負ひて、歐亞の二大洲に跨
れる大帝國に君臨し、終に我が國をも招致せんとし、文永五
年、高麗を介して、國書を我が國に送りしが、鎌倉幕府、書辭の
無禮なるを以て答へず、其の後も、彼、使を送れば、我、これを追
ひ、頗る強硬の態度を執り、益、防備を嚴にしたり。是に於て、世

元と我が國

文永の役 (一九三四)

弘安の役 (一九四一)

文永の役
二万五千人
弘安の役
二万五千人
北條時宗
東條時義
高麗廉王

祖、我が文永十一年、元及び高麗の兵を發して、我が國に來寇
せしめしが、會、暴風に遇ひて逃れ去れり。尋いで、弘安四年、夏
貴范文虎、沂都等をして支那・蒙古及び高麗の兵、十餘萬を率
ゐ、再び來寇せしめしが、復、颶風に逢ひ、大敗して遁れ去れり。
其の後、世祖屢、再舉を企てしかども、遂に果さざりき。是れよ
り、元と我が國との交通、全く絶えたりしが、足利尊氏、天龍寺
を京都に建つるに及び、毎年、船二艘を元に出して、彼と貿易
したり。

明と我が國 元亡び、明興るに及び、明の太祖、國書を我が征
西將軍、懷良親王に致し、倭寇を禁ぜしめんとせしが、其の志
を達するを得ず、又、元の失敗に懲りて、敢へて來攻せず、遺訓
して我を不征國の中に列せりと云ふ。我が足利義滿は、明の
成祖に臣事し、勘合の符を受けて、明に朝貢せしが、其の後、義

近古史 我が國と支那・朝鮮との關係

倭寇の初
(二〇一八)
倭賊：提三尺
刀、舞而前無能捍
者 (明史)

俞大猷
倭寇を討つ

俞大猷

持の時、一たび中絶したれども、義教以後は、再び勘合符を受
けて貿易を復したり。
倭寇 倭寇の始めて支那の史籍に見えたるは、元の至正十
八年の頃なり。明の初に方り、方國珍、張士誠の餘黨、我が國人
を誘ひて海上に出没し、浙江、福建、山東の諸省、多く其の害を
蒙りしかば、明の太祖は、防倭衛所を設けて、之が防禦に努め
たり。足利義滿の頃、倭寇一時、已みたれども、足利氏の衰ふる
に及び、海賊の跳梁、尤も甚だしく、明の沿海は、概ね其の掠奪
に遇ひ、明の汪直は、肥前の平戸に寓して、屢、海賊を江浙の地
に導きしが、後、汪直は、總督胡宗憲に誘殺せられ、福建に據れ
る倭寇は、俞大猷、戚繼光に破られ、こゝに始めて鎮定したれ
ども、餘黨は、なほ臺灣に據れり。

朝鮮王系



五

朝鮮の興起

高麗は、末年、財政、漸く紊れて、國力、次第に疲弊
せしが、忠定王以後は、倭寇の侵掠を蒙ること甚だしく、國勢
益、衰へたり。恭愍王の養子辛禔、立つに及びて、北の方、蒙古と
好を通じ、李成桂等をして、明の遼東を侵さしめんとせしに、
成桂、師を班へし、諸將と謀つて、辛禔を廢し、其の子、辛昌を立
て、政柄を握りしが、我が元、中九年、成桂、自立して王となり、國
號を朝鮮と改め、明の太祖の封冊を受け、都を漢陽に遷せり。

近古史 我が國と支那・朝鮮との關係

木子成桂
朝鮮建國
(二〇五二)

之を朝鮮の太祖となす。
太祖以後、數代の間は、國內治平にして、儒學大に興り、文物の盛なること、新羅・高麗の二朝にも勝れり。然るに、その後、倭寇の爲に、全國疲弊し、宣祖昭敬王の時に及び、我が豊臣秀吉の侵伐を蒙れり。

六

豊臣秀吉の征韓 神上りせり 我が豊臣秀吉、夙に明を伐つ志あり、先づ宣祖昭敬王に諭して嚮導たらしめんとせしに、宣祖、明を懼れて命を聽かさざりしかば、秀吉、征韓の兵を發したり。我が軍の京城を陥るゝや、昭敬王、使を明に遣して其の援を乞ひしが、當時、明は内に顧憲成等の東林書院を再興して、時政を論議するあり、外に愛親覺羅氏の滿洲に勃興するあり、國力漸く疲弊せる際なりしかども、朝鮮の敗亡は、自國を危くする恐あるを以て、神宗は、大軍を發して朝鮮を援けしめたり。

祖承訓敗る
(二二五二)
碧蹄館の戰
(二二五三)

前には祖承訓、平壤に戰ひて敗走し、後には李如松、碧蹄館に破られしかど、秀吉間もなく、病死せしかば、辛うじて事なきを得たり。されど、この役、將士を失ひ、軍資を費すこと多く、國勢漸く衰へたり。

第五 葡西兩國人の東航 我が國人の遠航

葡西兩國人の東航 マルコ・ポーロの東洋見聞録を世に公



マガ、ダ、コスバ

西紀一四九七年七月十八日葡王
ニシテ命を奉じルボスリシを發し喜
望峯一リ廻り一四九八年五月廿一日
印度に着し一四九九年一月九日
度カリカトに着し一四九九年一月九日
月歸國せり

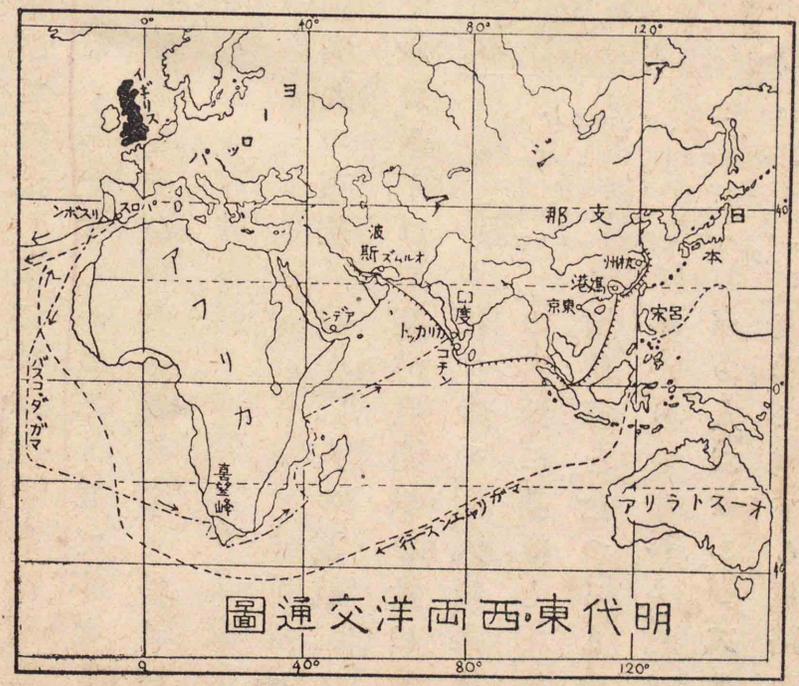
にするや、西人の、東洋の富源に垂涎して、探檢航海を企つるもの、多かりき。中にも、ジェノバの人コロンブスは、東洋に達する航路を

外人を招きし
マルコ・ポーロ
ニボトカ人
クリスチアノ
イタリヤ女王ノ命
テモリス

コロンブス 四回
一四三
一四五〇
アメリカン
南米
つるら
マ

バスコ、ダ、
ガマ印度に
来る(一一一
五八)

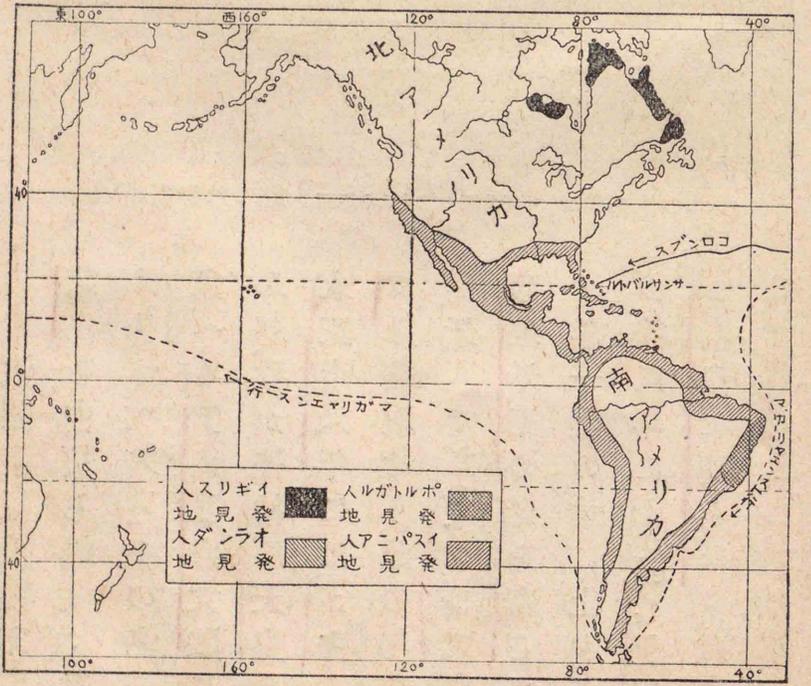
発見せんとし、西班牙の王后イサベラの援助を得て、アメリカ洲を発見し、葡萄牙人バスコ、ダ、ガマは、アフリカの南端、喜望峰を廻りて、印度に達する航路を開きたり。是より、葡萄牙人踵を接して、東洋に來航し、遂にゴアを根據地とし、總督をこゝにおきて、東洋の經營に力め、マラッカ



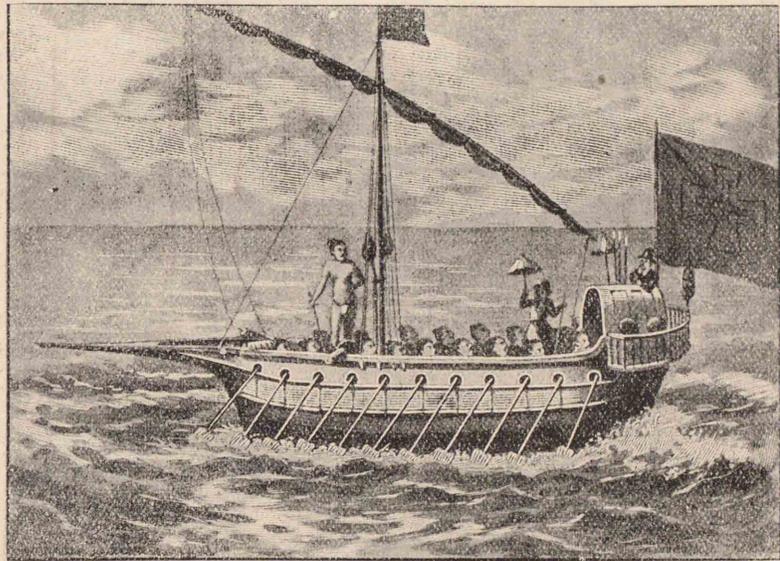
明代東西洋交通圖

鐵砲日本に
来る(一二二
〇三)

を取り、またオルムズをペルシアより奪ひ、更に進んで廣東に至りて支那と通商を開き、天文十二年には、我が種子島に來りて鐵砲を傳へ、後、阿媽港を租借して、東洋貿易の根據地とし、我が平戸にも、商館を設け、殆ど東洋貿易の全權を握れり。西班牙もコロンブス



マ
ガ
リ
ヤ
エ
ン
ス
世
界
一



船脚飛しせ用使頃の紀世六十紀西 船の牙葡葡

の新大陸発見後、西印度諸島を占領し、後、漸くアメリゴ・ヴェスプッチの名を負へるアメリカ大陸に入り、我が後、柏原天皇の永正十六年には、メキシコを略取せり。此の年、葡萄牙人マガリヤエンスは、西班牙王の命を奉じて、世界一週の途に上りしが、後、二年にして、フィリピン群島に達したり。此の時、マガリヤエンスは、不幸

週(二二七
九一二八
二)



スンエリガマ

牙斑西る生に牙葡葡年〇八四一紀西
年九一五一け受を命の世一ロロカ王
ル、トンセぬ率を船の艘五日廿月八
エリガマ 月一十年翌し發を港一カ
已は艘一時のこりせ過通を峽海ス
リれなと艘三し走迷は艘一し破難に
一の島群ンピリフ 月三年一二五一
クマけ助を王の共し達に島ブセ島小
七廿月四)リせ死敗てし征を島ンタ
日八月九年翌みの號アリトクビ(日
リせ着歸に港ルイヴゼ

にして土人に殺されしかど、乗組員出發後、三年にして歸國し、世界一週の功を遂げた。其の後、西班

マルチン、
ルイテル宗
教改革の初
め(二一七
七)エスイ
タ會の起り
(二二〇〇)

二
牙は、マニラを根據地として、東洋貿易に従事せり。
基督教の東漸 西歐人の東洋に來航するもの、益、多きを加ふるに至り、基督教も東漸したり。はじめ、ドイツのマルチン・ルイテル、宗教改革を唱道せしより、新教徒に歸依するもの漸く多く、舊教徒、次第に減ぜしかば、イグナチオ・ロヨラ・フランシス・ザビエル等は、エスイタ派を起して、教會の腐敗を洗

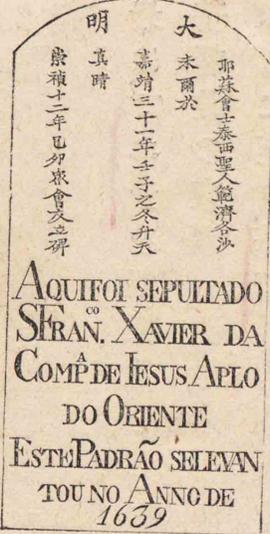
近古史 葡西兩國人の東航 我が國人の遠航

免罪状付
軍手合全う得
テオトシガ後
テオトシヨリ
四路村ヨリ
三三三三三

↓ドイツ(ハーン) ↓スイス ↓フランス

キリスト教
傳來(二二
〇九)

滌し、頻りに傳道僧を東洋に派遣して、歐洲に失へる衰勢を
恢復せんとせり。始めて基督教を我が國に傳へたるは、フランシス・ザビエルなり。天文十八年、薩摩に來り、また大内義隆



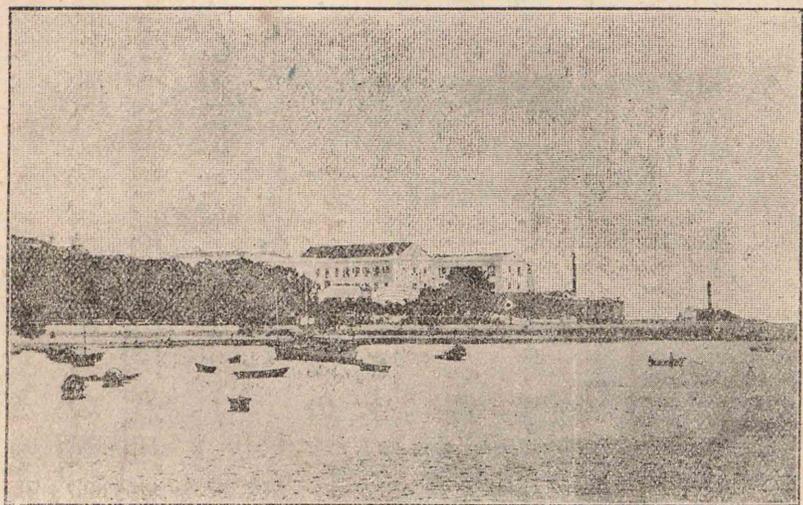
エビザ、スシンラフ、スシンラフ 碑念紀ル、スシンラフ 明はルエビザ、三靖嘉宗世の明はルエビザ、二十(年一十二天文)年一月、島ンヤシンサ省東廣日入、り送にアゴは骸屍す死てに、明は碑念紀りせ葬禮にここ、る係に立建年二十顧崇宗思の

等に謁して、布教の許可を得、コスモ・トレス Cosmo Torres を我が國に駐めて歸り、後、支

那に渡りしが、途に死したり。基督教、是より我が國に行はれ、九州・西國・京都附近に普及せり。西歐學術の東漸、支那にては、以太利人マテオ・リッチ Matteo Ricci、廣東に來り、姓名を利瑪竇と稱し、後、北京に入りて、神宗の許可を得、教會を建てて、天主教の弘布を務めたり。其の後、一時、布教禁

三
利瑪竇北京
に會堂を立
つ(二二六
一)

四



(港 媽 阿) 門 澳

止の嚴命、下りしかども、基督教徒は、みな、天文・數學・砲術に精通せしを以て、間もなく、其の禁を解かれ、皇族等も、これに歸依するに至れり。

我が國人の遠航、此の頃、我が國人の海外思想、大に發達し、遠航を試むる者あるに至れり。天正年間、大友氏・大村氏等の使者、喜望峰を巡りて、西班牙・羅馬に至り、降りて、慶長年間、支倉常

長、太平洋、大西洋を横ぎり、西班牙國王、羅馬法王に謁見して歸れり。當時、我が國人の進取冒險の氣象を見るに足るべし。此の他、山田長政、濱田彌兵衛、原田孫七郎等は、何れも海外に武名を成せり。

第六 元明の文化 其の我が國に

及ぼせる影響

一 元の文學 元代は、名儒、文人に乏しからざりしかども、朝臣は、皆、蒙古人にして、學者を遇すること重からざりしかば、文學の隆盛は、唐宋の盛時に及ばざりき。されど、戯曲、小説は、この頃より發達し、天文學、數學の如き、一新機軸を出せり。中にも、水滸傳は、元代小説の白眉にして、我が國語に翻譯せられたり。

見
見
見

宋濂 方孝孺

二 明の儒學文藝 其の東流 明の名儒として、第一に指を屈すべきは、宋濂及び其の門人方孝孺なり。方孝孺は、惠帝に仕へて、謀議に參し、成祖に囚へられ、大節を守りて從容、死に就けり。降つて、明の中葉、王陽明、守仁出でて、良知を致すべきを説き、知行一致を唱へ、朱子學の所謂格物窮理の說に反對したり。世に、之を姚江派、又陽明學といふ。

姚江派

陽明は、其の門人、頗る衆く、其の學說、一世を風靡せしが、我が徳川時代に於ては、中江藤樹、山鹿素行等、この說を傳唱し、世道人心を益すること、鮮少ならざりき。

元代の文流

金瓶梅
西廂記
近古史
淡

近古史 元明の文化 其の我が國に及ぼせる影響

近世史

近世は、清朝三百年間に亙り、西歐列強、漸く東漸して、清の四境に迫り、邊境、尤も多事の時なり。

第一 清の建國

一 愛親覺羅氏の崛起 明の神宗の頃、愛親覺羅氏の祖、奴爾哈赤、今の興京より勃興せり

我が天正十一年、奴兒哈赤、兵を擧げ、先づ、近傍の地を定め、ついで、長白山附近を平げ、我が元和二年、自立して汗となり、國を後金と號したり。之を清の太祖となす。明の神宗、朝鮮と力を併せて之を夾撃せしが、反つて大敗し、太祖、漸く勢を得、遂に瀋陽に都せり。今の奉天府これなり。

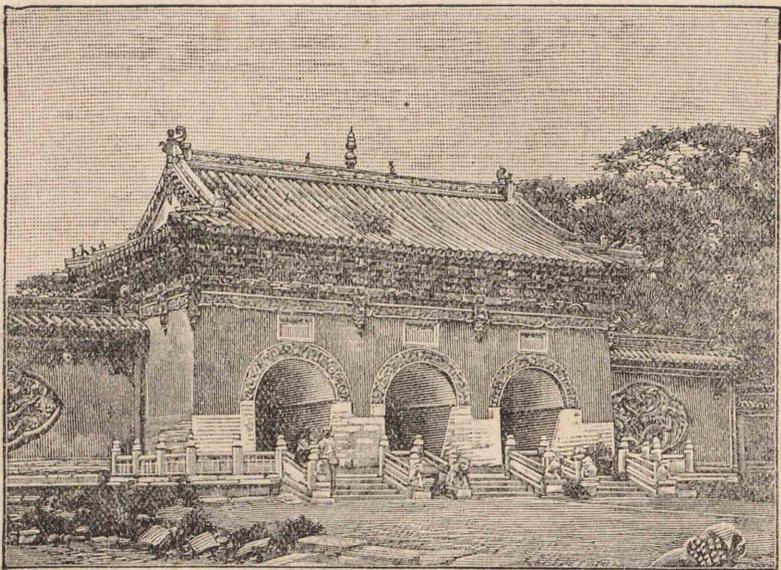
太祖帝と稱す(二二七六)

二

太宗即位(二二八七)

大清の國號(二二九六)

世祖北京に入る(二三〇四)



北陵正門 北陵正門に入る大石の樓あり
北陵正門に文に大清昭陵神功聖德碑あり

清の建國 太祖の子太宗は、先づ漠南蒙古を従へ、皇帝の位に即き、國號を大清と改め、前後二回、朝鮮を征し、之を降して封冊を受けしめ、尋いで南の方、明の境を侵し、山海關に迫れり。太宗死し、世祖、立つに及び、明の流賊、李自成、北京を侵すと聞き、大兵を發して之を攻めしに、明の將



景のンジバルア 黒龍江の北岸黒龍州ゴラフスエチスノクスの府の管
内にあり五百六十六戸あり

何れも明を伐つて功ありしを以て、吳三桂は雲南に、尙可喜は廣東に、耿仲明の子繼茂は福建に封ぜらる。然るに、聖祖、三藩の強大を患へ、之を撤せんとしたれば、吳三桂まづ叛し、耿繼茂の子精忠及び尙可喜の子之信、之に應じ、江南一帶、皆賊の有に歸せり。由りて聖祖大兵を發して之を征すること八年、耿精忠、尙

三藩の平定は、明の遺臣、吳三桂、耿仲明、耿繼茂、尙可喜、之を征すること八年、耿精忠、尙

臺灣平定
(二二四三)

之信は降り、吳三桂死して、孫世璠亦敗亡し、反亂全く平定したり。

三臺灣の平定 初め、明の遺臣、朱成功、魯王を奉じて清軍に抗せしが、力盡くるに及び、臺灣に逃れ、和蘭人を逐ひて、其の地に據り、子、朱經、孫、朱克塽に傳へたり。三藩平定の後、聖祖、兵を遣して、克塽を滅し、臺灣を併せたり。

三北境の經營 さきに、露西亞人、雅克薩の地を取りて、アルバジン城を築きしかば、聖祖、愛琿城を築きて、北邊を鎮

し、又、兵を發して、アルバジン城を陥れぬ。尋いで、聖祖、書を彼得大帝に送り、國境を定めんことを求め、内大臣、索額圖、

露國の使者、コロウインと、尼布楚に會して、外興安嶺、額爾古、納河を以て、兩國の界と定めたり。

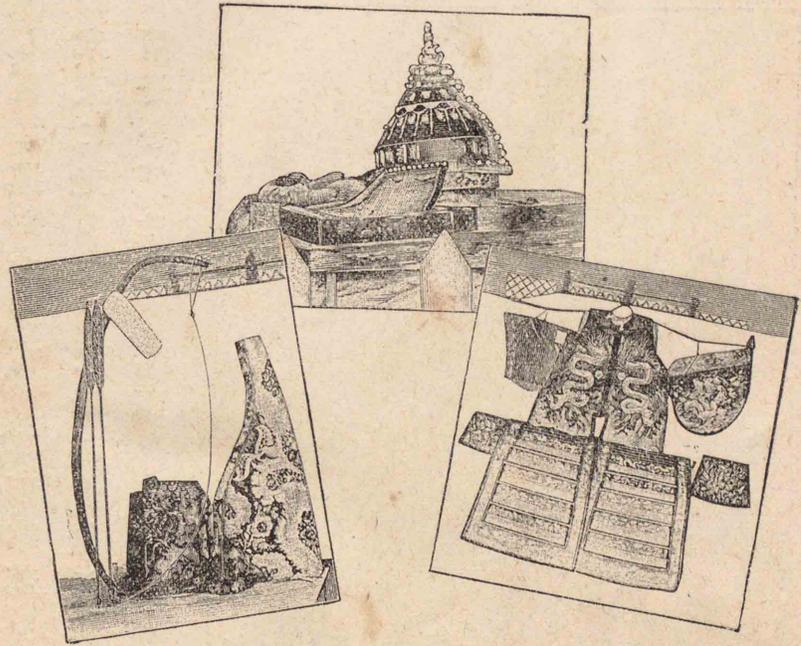
四準噶爾の親征 瓦刺の也先可汗の裔に、準噶爾部の酋

尼布楚條約
(二二四九)
準噶爾平定
(二二五七)

宗喀巴の死
(二〇七七)

駐藏大臣を
置く
(二三八四)

四



乾隆帝所用の甲冑 清皇室所藏

宗喀巴の創めたる黄教喇嘛の大教主たり。其の後、聖祖の子世宗(雍正帝)の時に至り、再び之を征し、駐藏大臣を拉薩に置き、西寧辦事大臣を西寧府に置きて、西藏青海を鎮せしめたり。
高宗の武功 世宗の子高宗(乾隆帝)も亦

乾隆帝(二
三九六—二
四五五)

英明の主にして、在位六十年の久しきに及び、天山南北路を平げ、緬甸・安南・暹羅等の諸國を降し、清朝隆盛の極に達したり。暹羅は、先に緬甸に併領せられしが、漢人鄭昭兵を擧げ、緬甸の守兵を逐ひて、國を立て、其の弟鄭華、清の封冊を受けたり。今の暹羅國王の祖なり。

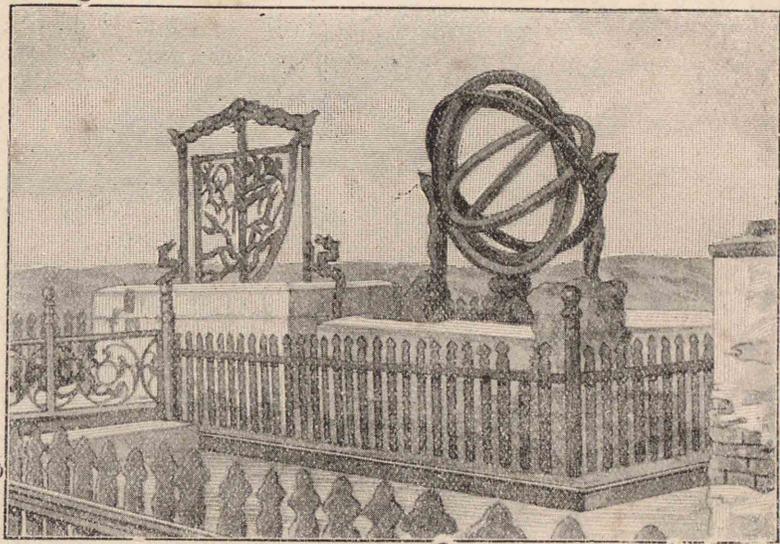
第二 清の制度・學術

一 制度 清の制度は、概ね聖祖の世に成り、高宗の時に之を修飾したるものなり。

内閣
六部
軍機處大臣

官制は、上に内閣ありて萬機を總理し、其の下に吏・戶・禮・兵・刑・工の六部ありて、政務を分掌せり。内閣には、大學士・協辦大學士を置き、六部には、尙書・侍郎あり。高宗以後は、別に軍機處大臣を置き、大學士・尙書・侍郎等より勅選して、軍國の機務を參

外書目録に
一白雲清解
大清一統志
勅撰集



天文臺 北京内城東南隅(即崇文門)にあり
南懷仁の策に據りて建せられたるもの

の名儒を重用したりしかば、學者輩出し、政府民間にて編著せられたる書籍、極めて多かりき。中にも康熙字典、淵鑑類函、佩文韻府、(勅撰)四庫全書提要(高宗)の如きは、勅撰に成れる大著なりとす。清の儒者は、元明諸儒の空論に倣はず、經史を精究して、憑據の確實ならんことを務め、學

執りて
便利

考證學

風こゝに一變せり。之を考證學といふ。考證學は、明の遺儒顧炎武によりて、其の端を開かれ、清朝となりては、閻若璩、毛奇齡等、數多の大家、相ついで起れり。世祖の北京に入りて天子となるや、獨逸人湯若望

欽天監

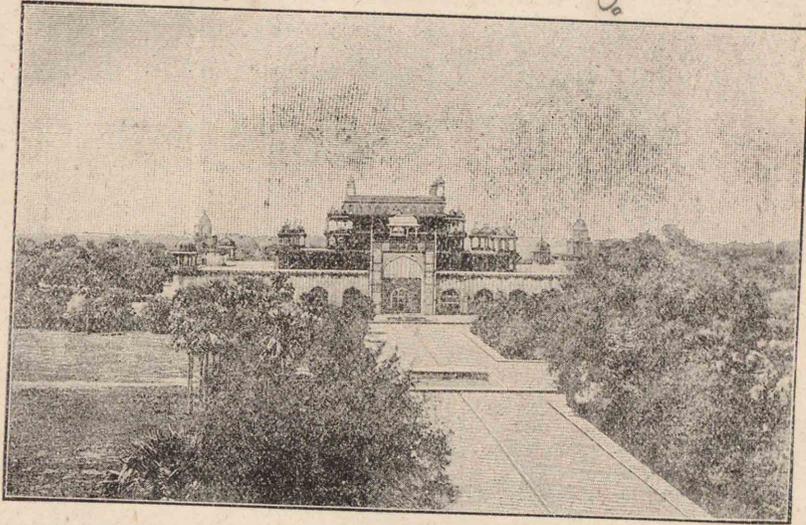


湯若望 望若湯 獨逸人 清の世祖の
時欽天監となし、康熙五年死す、年六十七

となししが、聖祖、また、白耳義人南懷仁(フェルベイスト)を任用せしかば、之が爲に、支那の天文・曆法・砲術を一新し、且、始めて支那帝國を測量製圖するを得たり。されど、聖祖は、後、基督教禁止の令を下し、世宗も、之を嚴禁せしより、西學の東流は、一

アクバル帝
位に即く
(二二二六)

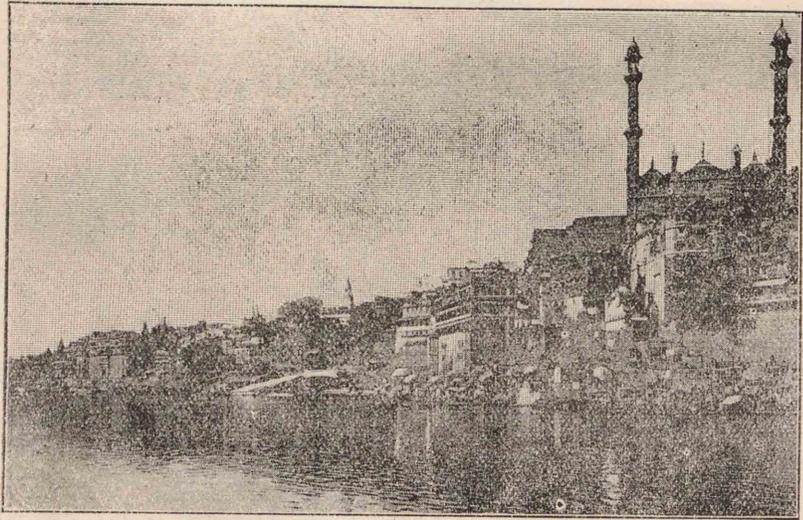
温都教
仰る教員



アグラの北東にあり 帝の大墓

バル大帝立つに及びて、印度の大部を征服し、頑強なるラジュプット族を亡して、都をアグラにさだめ、其の領する所、西はアム河より、東はガンガ河の下流に及び、制度を定め、文學を奨め、從來、回教諸王の土人に課したる非回教税を廢して、宗教の自由を許し、温都教徒と婚を通ぜしかば、温都教徒の心服を得、國內能く治まれり。

アーマドナ
ガル征服
(二二一九六)



オラーラの北東にあり 墓

莫臥兒帝國の末路 されど、印度の南方には、アーマドナガル等の回教國、なほ帝國に抗せしかば、帝は、屢之を征し、終に志を果さずして死し、其の子ジャハンギールも、亦、しばしば之を征したれども、平ぐることは能はず、ジャハンギールの子シャール・ジャハンやうやく、アーマドナガルを滅し、シャー・ジャハンの子オーランゼブの時に至り、始めて南印度を討

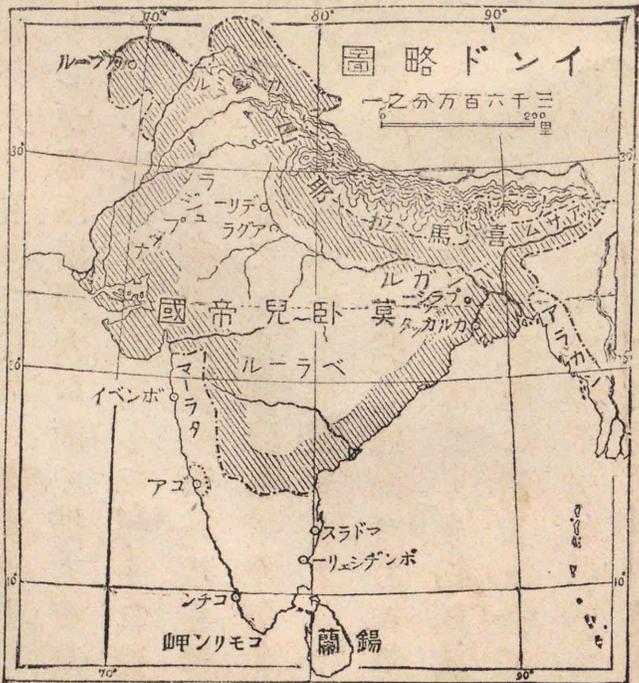


堂殿の其と拜禮の徒教都溫
 化轉の教ンマーラアのへ古は教都溫
 印徒教の其は時現てしに教宗るたし
 靈頃の出日 む占を二の分三の人度
 とくるす拜禮を陽太し浴沐に河恒河
 參に殿金黃てしく斯し如がす示に圖
 場靈の高最は殿金黃すと例をるす拜
 りなばれた

平して、全印度を
 一統したり。帝の
 世は、莫臥兒帝國
 の全盛時代にし
 て、尤も富強を極
 めしかども、非回
 教税を課するの
 一事、溫都教徒の不
 平を招き、**マーラタ**
 同盟 (Maharatta Alliance)
 を作りて叛亂せしか
 ば、帝親ら大軍を率
 りて南征し、軍に在るこ
 と二十餘年にして歿

印度の
 帝に奉
 帝カニシカ
 帝カニシカ
 帝カニシカ

したり。帝の死後、暗
 君相つき、諸州多く
 獨立し、**マーラタ**同
 盟は、益、猖獗を極め、
 加ふるに、**波斯人**、**ア
 フガニスタン**を略
 して國を立て、**デリ**
 に入り、殺掠を恣
 にして去り、其の後、
アフガン人、六たび、
 印度を蹂躪したれ
 ば、**デリー**以西の地は曠野とな
 りて、西歐人、續々印度に來りて、
 帝國を侵掠するに至れり。



和蘭東印度
商會創設
(二二六二)

バタビア府
建設(二二
七九)

日本との通
商(二二六
九)

第四 蘭英諸國の東方經營 英領印度

一 和蘭の東洋貿易 葡萄牙人の初めて印度に來航せしは、西曆十五世紀の末葉なりしが、葡西兩國人の、漸く勢力を東洋に失ふ時に方り、和蘭は、東印度商會を設立して、頻りに船舶を東洋に派し、盛に貿易を營みて、葡西兩國の舊業地を奪ひ、瓜哇を取り、茲にバタビア府を建て、東洋貿易の根據地とし、遂にこの二國に代りて、東洋の商權を掌握せり。

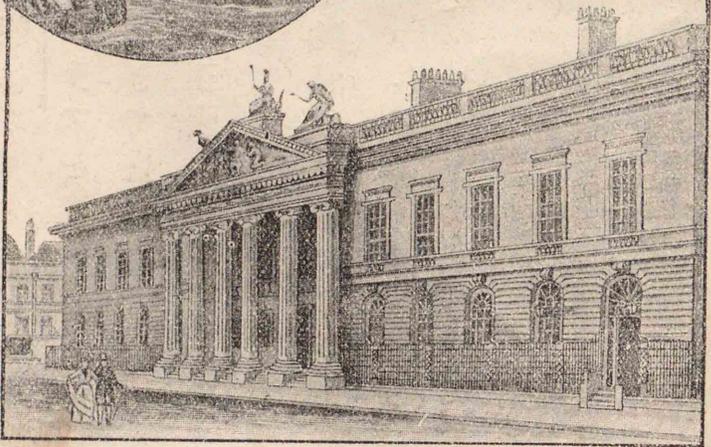
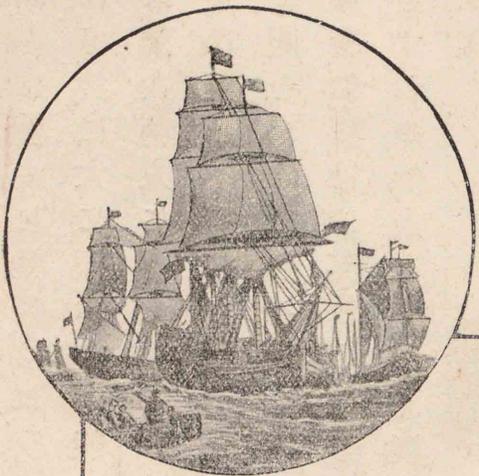
これより先き、慶長十四年、始めて我が國と通商せしが、島原の亂に、幕府の命を受けて、賊軍を砲撃してより、葡西兩國人が、入港を禁ぜられたるにも拘はらず、長崎に居留し、永く我が國と貿易したり。

二 英國の東方經營 英吉利にては、我が慶長五年、東印度商會

英國東印度
商會創設
(二二六〇)

日本との通
商(二二七
三—二二八
一)

ロンドン東印度社會
とその第一回派遣艦
創設年一八五八
圖建物は一八三〇年
に設けられたる第一回派遣艦
を模して作られたるものである



を設けて
印度貿易
に従事し
和蘭諸國
と競争せ
しが、ついで、日本及び支那にも來れり。然るに、日本の貿易とマライ群島の侵

マドラス占領(二二九)
九) ボンベイを得(二三二)
一) カルカッタを取る(二三四六)

三

略とは蘭人に妨げられ、又支那の貿易は、葡萄牙人に妨げられて、共に大に振ふこと能はざりしかども、獨り印度に於ては、蘭人・葡人に勝ちて、マドラスを根據地とし、西はボンベイ、東はカルカッタに商館を開きて、盛に通商を營み、遂に莫臥兒帝國を亡し、之をイギリス王國の權下に移したり。

印度に於ける英佛の競争 初め、英人のマドラスを根據地とするや、佛人も、亦東印度商會を創め、ボンヂェリイに據り

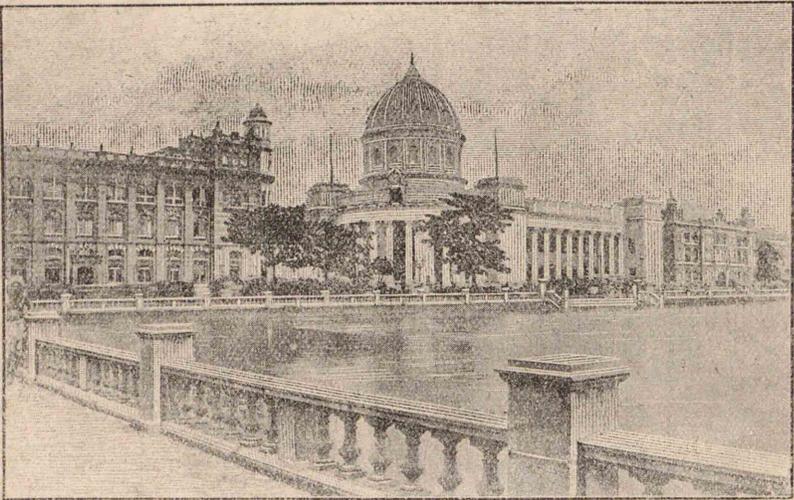


アイラク、トルベロ ブイラク

と記書の社會度印東時の歳八十は年三五七一紀西り來に度印てし六五七一り歸に國本て以を故の病年七五七一り來にスラドマび再年〇六七一 ち勝に戰のーシッラアびた三年四六七一り歸に國本び再り歸に國本年七六七一り至に度印りせ殺自年四七七一

チヌプレースを以て總督とし、莫臥兒帝國の衰亂に乗じ、諸侯を威服して、印度を兼併せんとし、英人と

アルコットの戦(二四一)



局便郵タッカルカ 局便郵(Black hole)牢黒に隅北東の局便郵 六十四百人英夜の日十二月六年六五七一紀西 餘呎六十き高呎四十幅呎二十二たし去死く悉外の人三十二りに至に朝翌がしれらめしせ牢入に爲の人ルガンベ人りせと念紀てき敷を石理大黒に茲今り

隙を生じ、烈しく争闘せり。時に英國東印度商會の書記クライブ、少數の兵を以て、急にアルコット城を襲ひ取り、勇名を全印度に轟かせり。佛國の總督デュプレースも、亦デッカンの諸侯を制して、マドラスの北に、その領土を廣め、殆ど英人を壓倒せしが、本國の方針、俄に一變して、チヌプレ

ブラッシーの戦(二四一七)

イスを召還したれば、クライブは、此の機に乗じて、その勢威を張れり。會、ベンガルの大守、カルカタを襲ひ、英人百餘人を執へて、土牢に投じ、窒息せしめしかば、クライブは、ブラッシーの一戦に、ベンガルの大軍を破りて、大守を擒にしたり。之を英領印度建設の始とす。其の後、クライブは、東印度商會よりベンガル總督に任ぜられ、兵力と謀略とを以て、巧みに莫臥兒帝國に干渉して、收稅權を收め、漸く佛人を驅逐して、最後の勝利を英人の手に收めたり。

印度大總督の初(二四三四)



ヘーリスチングス 三三七一紀西 スグンチスーへ
記書社會度印東年〇五七一九生に年
歸びた一りあに度印間年四十りなと
八七一九りと督總大年四七七一し國
九七一九れらせ喚召に爲の獄疑大年六
す死年八一八一りなと罪無年五

印度大總督の設置
莫臥兒帝國の滅亡
クライブの後、ワレン、ヘーリスチングス、ベン

第二マラータ戰役(二四六三)

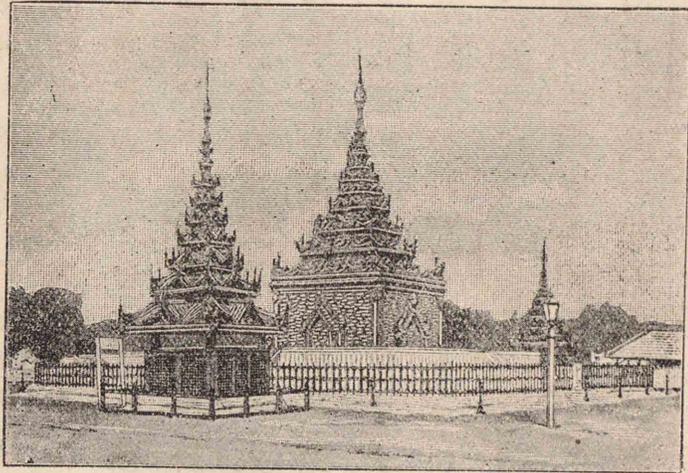
莫臥兒帝國の滅亡(二五一七)

ガルの總督に任ぜられしが、やがて、英領印度大總督に任ぜられて、マドラス及びボンベイをも統ふるに至れり。これを大總督の始となす。其の後、ナポレオン一世、窃に印度の諸侯を助けて、佛國の印度に於ける勢力を恢復せんとせしかば、大總督ウエルズリー侯は、大佐ウエルズリー(後のウヰリ)をして之を討平せしめ、(第二マラータ戰役)莫臥兒帝を、英人の保護とし、歐人を雇ふことを得ざらしめ、以てナポレオンの雄圖を挫きて、英領印度の基礎を固くせり。ついで、ダルフイージ伯、大總督となるに及びて、シック部(温都教の一派)の亂を平げ、教育を奨勵し、鐵道、電信を設けて、印度を開化に導きしが、印度人、却つて之を喜ばず、土民、大叛亂を起し、中印度、皆之に應じ、國內大に亂れ、大總督カニング、一年有半にして、漸く之を討平し、遂に莫臥兒帝を廢して、バルマに幽せり。アクバル大帝より、殆ど三百年にして

五 東印度商會の廢止(二五一八)

ビクトリア印度女帝の號(二五三七) 印度のバルマ州(二五四六) 馬來連合諸國(二五五五)

莫臥兒帝國、全く滅亡せり。



緬甸シミンド王の墓 マンダラ城(周一哩四分の一) 緬甸シミンド王の墓 (Mindon) シミンド内に (六十瓦の壁を廻す) 西紀一八五二 年一七八八年まで王がした其の子の時に英國に併せらる

印度皇帝の號 英國政府は、此の機に乗じ、東印度商會の政權を收めて、政府に移し、印度大總督を印度大臣の管下に置きしが、ついで、明治十年、ビクトリア女王は、印度女帝の號を稱へたり。其の後、バルマは、英領印度の一州となり、ついで、マライ半島の諸小國も、次第に英國の保護國となれり。

六

英軍カブール侵入(二四九九)

アフガン國保護(二五三九)

英國の阿富汗經營

英國は、印度の經營、其の歩を進むると同時に、アフガニスタンにも、亦、手を染めたり。はじめ、印度大

總督オークランドは、アフガニスタンの僭王、ドスト、ムハメッドを懷けて、露西亞に當らしめんとせしに、王これに従はず

りしかば、天保十年、兵を出してカブールに入り、前王シャハ、シニチャーを擁立したり。然るに、アフガン人、服せず、ドスト、ム

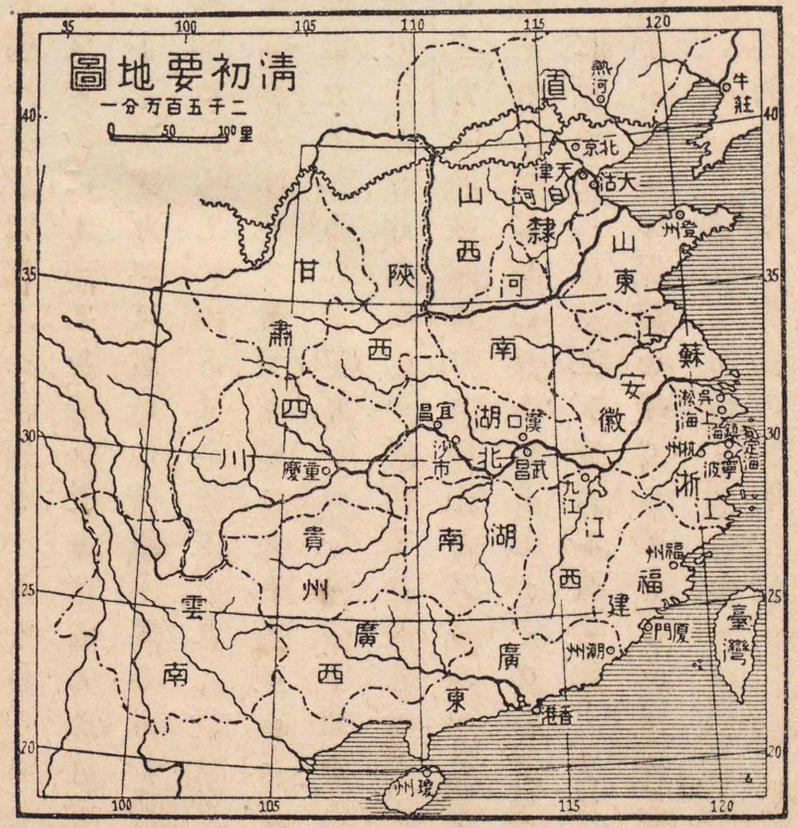
ハメッドの子を奉じて亂を起し、英國の駐屯軍を殺戮せしかば、こゝに第一アフガン戰役起れり。其の後、ドスト、ムハメッド、

復、王となり、英國と和して波斯の兵を破りしが、その後、アフガン人、また英人に叛きたれば、第二アフガン戰役起り、アフ

ガニスタンは、是より英國の保護を受くる事となれり。(明治十三年)

第五 英清の交渉 英佛の北清侵伐

一 鴉片戰役 印
 度より清國に
 輸入する貿易
 品の主なるも
 のは、鴉片なり
 しが、清人、頗る
 之を嗜み、精力
 を弱め、生命を
 害するを以て、
 仁宗、その輸入
 を禁じたれど
 も、容易に行は
 れずして、密賣



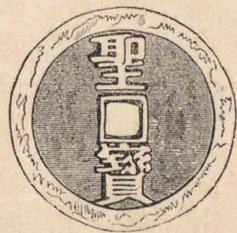
鴉片燒棄
 (二四九九)

鴉片戰役
 (二五〇〇)
 (二五〇一)
 (二)

盛に行はれたり。仁宗の子宣宗の時に至りて、林則徐をして、鴉片の事を管せしめしが、林則徐廣東の英商に迫り、其の所藏の鴉片を出さしめ、二萬餘函を燒き棄て、鴉片の賣買を嚴禁し、終に英人の通商を禁じたり。

是に於て、英國は、貿易の保護を名とし、ブレマーをして、軍艦を率ゐて清國を攻めしめたり。天保十一年ブレマーは、先づ舟山島を占領し、廣東、廈門、寧波の諸港を封鎖し、尋いで別將エリオットをして直に渤海灣に入り、白河の口に迫らしめしかば、宣宗大に驚き、林則徐の官を罷め、兵備を撤して、和を議せしめしが、朝議復、變じ、林則徐を起し、攘夷の詔を下して、英人を逐はんとせり。されど、毎戦、利あらず、吳淞、鎮江、皆陥り、英軍、南京に迫りしかば、清廷は、耆英、伊里布等をして、和を議せしめたり。

執へたるに生まれり。此時、佛國宣教師も、廣西にて清國官吏に殺されたりしかば、ナポレオン三世、兵を發して英國と連



長髮賊の貨幣

合し、安政四年、先づ廣東を陥れ、更に北上して天津に逼れり。清廷は、已むを得ず、天津にて和議を結びしが、翌年、清國砲臺は、批准交換の爲に、北京に向ひたる英佛公使を砲撃せり。是に於て、二國、大に清國の不信を怒り、英佛同盟軍、白河に入り、大沽を陥れ、天津を取りて、遂に北京に入り、宮殿を焼きしかば、文宗、難を避けて熱河に走り、恭親王をして和を請はしめたり。露西亞公使イグナチエフ、その間に立ちて調停し、清國は、償金本百萬兩を英國に、^{時、北河を渡りて}入百萬兩を佛國に支辨し、牛莊、登州、臺灣

北京條約
(二五二〇)

五

潮州、瓊州、九江、漢口の諸港を開き、基督教弘布の自由を許し、九龍半島を英國に割讓することを約せり。之を北京條約といふ。

長髮賊の平定 清國、己に外國との紛議を收めたれば、是より、力を内亂の鎮定に專にせり。當時、長髮賊は、なほ江南に蟠居して猖獗を極めしが、文宗崩じ、穆宗立つに及び、米人ワルド、^{Gordon}英人ゴルドン等を招聘し、洋槍隊を組織して、賊徒を征せしかば、是より賊勢頓に衰へ、賊魁洪秀全も、事の成らざるを見て、南京に自殺し、餘黨悉く平ぎたり。^(元年)この亂、前後十五年に亙り、其の侵掠を被れる所、十六省に及べりと云ふ。

長髮賊平定
(二五二四)

第六 露人の東略

一

露人のシベリア經營 露西亞は、中世紀の頃、蒙古人の侵掠

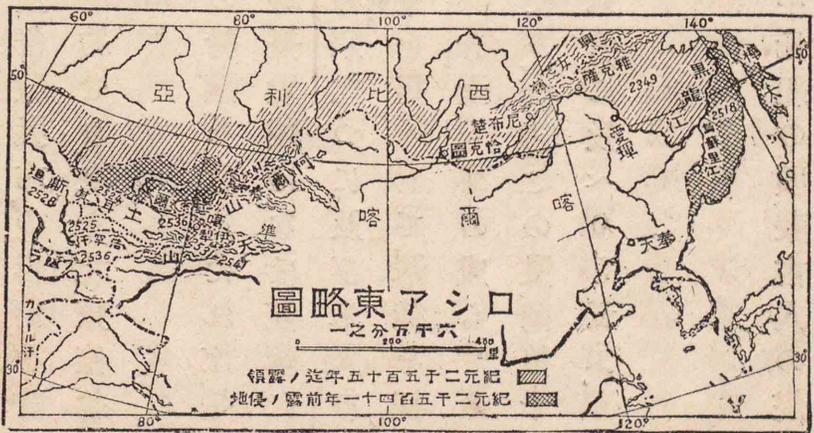
露西亞國獨立(二一四〇)

ハリス族
ハリス族

シベリヤ侵略の端(二三九)

を蒙りてより、二百餘年の間、欽察汗國の治下に屈せしが、我が文明十二年、モスクバ大公イバン三世、始めて欽察汗の羈絆を脱し、露西亞帝國の基を立てたり。ついで、イバン四世、四方を征服して、大に露西亞の版圖を廣め、また、シベリア侵略の端を開けり。

初めシビル汗、今のトボルスクの邊を領せしが、コサックの酋長イエルマク、衆を率ゐてウラル山を越え、シビル汗を追ひて、其の地をイバン四世に獻じたり。シベリアの名



二

尼布楚條約(二三四九)

恰克圖條約(二三八七)



ア、フヨビラム フヨビラム
 テベ年〇一八一紀西はキスルーム
 江龍黒年六四八一に生にクルブル
 アリベシ部東年翌り歸てし行航な
 ず檢探を江龍黒後れらせ任に督總
 を約條理愛てしを國清回二とくる
 な伯ルームアてりよに功めしは結
 りへいとキスルームアれらけ授

こゝに起れり。
 ニ布楚條約 露西亞は、其の後、頻りにコサック人を東方に派し、エニセイ河、レナ河の地方を略取して、その土人を懐け、正保慶安年間、黒龍江の地方を探檢し、寛文年間、黒龍江北岸にアルバジン城を築きたれば、これより兩國境界の争起り、元祿二年、聖祖は尼布楚條約を締結し、以て露の南下を防ぎたり。然れども、高宗以後は、上に英主なく、内亂外寇、交起り、終に露西亞東侵の志をなさしめたり。

恰克圖條約 愛瑯世宗は、露國と通商條約を結び、恰克圖

愛瑛條約
(二五二八)

沿海州占領
(二五二〇)

四

を互市場と定めしが、其の後、東シベリア總督ムラビヨフは、ニコラ一世の命を奉じ、安政元年、黒龍江を下りて、河岸一帯の地を占領し、清が長髮賊の亂に苦めるに乘じ、安政五年、國界改定の議を迫りて、愛瑛條約を結び、江北の地を取り、烏蘇里東岸の地を兩國雜居の地と定めたり。萬延元年、英佛連合軍の北京に入るや、イグナチエフ、之が調停を計り、其の報酬として、烏蘇里江東の地を得、その南端に、浦鹽斯德港を開きたり。

露西亞の中央亞細亞經營 中央亞細亞は、帖木兒大王の死後、内亂交起りて、國內分崩せしが、其の後に至り、基華汗國、布哈拉汗國、浩罕汗國等、相ついで起れり。然るに、其の後、三汗國互に爭鬪を事とせしかば、露西亞、此の機に乗じて、中亞細亞を侵略せんとし、慶應元年、まづ浩罕の兵を破り、明治元年、布

浩罕布哈拉
兩汗國保護
(二五二八)

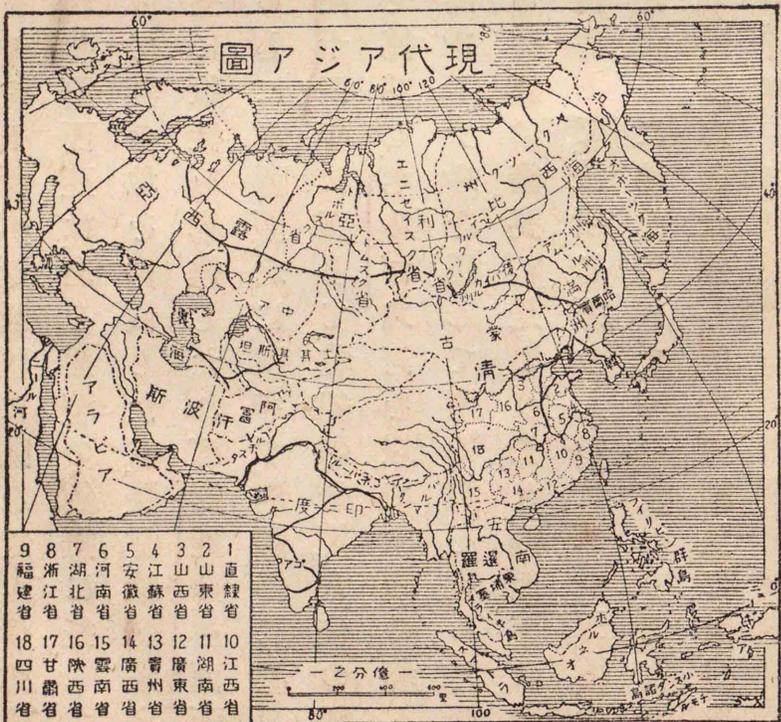
基華汗國保
護(二五三
三)

浩罕汗國滅
亡(二五三
六)

五

哈拉の軍を破りて、二國を屬國とし、明治六年には、基華をも屬國としたり。明治九年に至り、浩罕人、露西亞の羈絆を脱せんとして亂を起し、が、反つて、露西亞に滅されて、その屬州となれり。

伊犁事件 斯く露西亞は、中央亞細亞に於ても、清國と接



露國の伊犁
占領(二五
三一)

伊犁條約
(二五四一)

六

壤するに至りしが、會、ヤクローブベグ、回疆に亂を起し、伊犁も亦、亂れたれば、明治四年、露西亞は、名を邊境の鎮撫に托して兵を進め、伊犁に入りて、其の地を占領したり。陝甘總督左宗棠、連年、兵を用ひて、遂に叛徒を鎮撫したれば、清廷は、露西亞に伊犁の返還を求めしに、露西亞、之に應ぜず、兩國、終に兵を境上に進めしが、明治十四年に至りて、曾紀澤、全權大使の任を帯び、露京に入りて協議し、ホルゴス河を以て兩國の境とし、清國は、償金九百萬ルーブルを出して、漸く局を收めたり。中央亞細亞に於ける英、露の衝突、是より先き、露西亞は、漸くカフカズ地方を侵畧して、波斯に逼りしかば、波斯王、屢之と戦ひたれども、克たず、終に地を割きて和を乞へり。是より、露西亞は、波斯を懷けて、勢力を扶植し、中央亞細亞に於ける勢力も、益、盛になれり。

露國のメル
フ占領(二
五四四)

英露境界劃
定(二五四
七)
パミル事件
決す(二五
五五)

一

明治十七年、露西亞は、トルコマン族を破りて、メルフを併せ、アフガン領ヘラットに逼りしかば、英露は、こゝに衝突せしが、明治二十年、英國は、一步を譲り、露領とアフガン領との境界を定めたり。其の後、パミル境界の争、清露英の三國間に起りしが、明治二十八年に至りて、協議成れり。

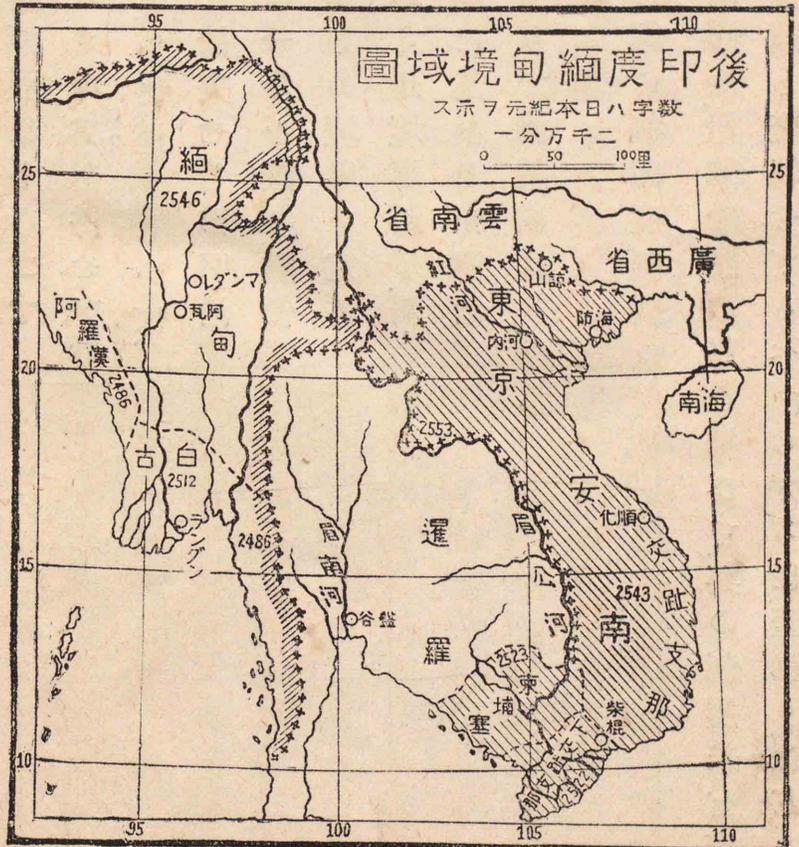
第七 佛國の後印度經營

安南事件 清國は、伊犁紛議の局を結びて、其の創痕未だ癒えざるに、又、佛國と交戦せざるべからざるに至れり。はじめ、



越南國起る
(二四六二)

安南に阮福映と云へるものあり、佛國の宣教師ピニョーの勸に從ひ、地を割き、通商を許すを約して、佛國の援助を求め、遂に大越皇帝を亡して、越南國を建て



佛安條約
(二五二二)
東埔寨國保護
(二五二二)
三)

佛安條約改訂
(二五三三)
四)

越南國保護
(二五四三)

たり。今の安南帝の祖なり。これを世祖といふ。然るに。其の後、越南は、前約を履まず、且、屢佛國の宣教師を虐待せしかば、ナポレオン三世は、兵を發して越南を攻め、戦争數年に互りしが、文久二年、越南王、力盡きて和を請ひ、南邊三州及び崑崙島を割き、償金二千萬フランを出せり。翌年、東埔寨は、自ら佛國に乞ひて保護國となれり。

佛領印度支那 明治七年、佛國は、佛安條約を改訂して、紅河の航通を自由にし、衛兵を諸港に置くことを承諾せしめしが、十五年に至り、大兵を發して河内を占領したり。是に於て、安南帝は、長髮賊の殘將、劉永福をして佛軍を伐たしめしが、翌年、佛國海軍の將クールベール、順化灣の砲臺を陥れしかば、安南帝、終に和を請ひて東京地方を割き、且、フランスの保護を受くることとなれり。

三

清佛の交渉

然るに、安南は、元、清帝の封冊を受けしを以て、清國は、此の條約に異議を唱へ、明治十七年、清軍は佛軍の諒山を占領せんとするを撃退せしかば、是より佛安事件は、清佛事件となり、クールベールは、福州附近に福建艦隊を撃沈し、臺灣諸港を封鎖し、澎湖列島を占領せり。明年、清將馮子材は、佛軍を破り、クールベールは、病に罹りて死せしが、會、フランスの内閣、交迭して、外交の方針、一變せしかば、兩國、終に和を結び、清國は、佛安條約を承認したり。

四

暹羅國との關係

佛國は、更に暹羅を侵畧せんことを企て、明治二十六年、兵力を以て、眉公河東の地を占領したり。暹羅王は、頻りに抗議したれども、効なく、終に其の要求を承諾せしが、英國の異議を唱ふるに及び、眉公河上流に、五十英里の中立地を選定することを約したり。

清佛交戦

(二五四四)

一、二五四

五)

佛國眉公河

東占領(二

五五三)

第八 清國に對する諸強國の壓迫

一

清國の衰勢

西歐の列強は、清國の衰弊に乗じて、頻りに清の四境を侵し、露國は、新疆省蒙古、滿洲の方面より、英佛は南方より、各、其の勢力を伸ばし、清の國威、漸く蹙まれり。されども、清國は、舊を守りて新に就くを喜ばず、尊大自ら居り、隣邦を侮りて、敢へて我が國と戰端を開き、之が爲に、反つて大敗を招き、己の弱點を暴露するに至れり。

二

列強の壓迫

是に於て、列強は、益、輕侮の念を生じ、各、利權を獲得せんとし、獨逸は、膠州灣を、露國は、關東州を、英國は、威海衛を、佛國は、廣州灣を租借し、又、内地に於ける鑛山採掘、鐵道布設の權を強要したり。

是の時に方り、變法自強の説、頻りに民間に起り、德宗、亦、改革

北清事變
(二五六〇)

の志あり、康有爲等を擧用し、大に爲す所あらんとせしが、滿人之を喜ばず、西太后を起して政を簾中に聽かしめ、帝を幽せしかば、保守排外の風、盛に起れり。偶、義和團の暴徒、山東に起り、遂に北京に入りて、各國公使館を包圍せしかば、日英露佛米等の諸國、連合軍を組織して、北京を占領し、各國公使を救へり。清廷、因りて元兇を所罰し、償金を約して和を請へり。

三
清國の末路 露國は、この事變を機として、滿洲に出兵し、事定まりて後も、敢へて撤兵せざるのみならず、漸く手を韓國に伸ばし、我が國權を殺がんとせしかば、我が國、遂に戰を宣し、茲に日露の戰役を見るに至れり。其の結果、我は、關東州の租借權を得、韓國を我が勢力圈内に移したり。其の後、德宗、西太后、相尋いで没し、宣統帝、幼冲を以て踐祚するや、清廷の威信、全く地に墜ち、革命の思潮は、國內に充滿し、明治四十四年、

清朝滅亡
(二五七二)

革命軍、先づ南清に起り、忽ちにして全國に瀰蔓するに至れり。清廷、驚駭、策の出づる所を知らず、宣統帝、位を退き、清朝、ここに滅亡し、共和政體、新たに成り、國を中華民國と稱し、袁世凱、推されて假大總統となれり。されど、共和政體の基礎、未だ固からず、列國、亦未だ承認を與へず、支那、今後の政變は、未だ俄かに豫測すべからざるものあり。

修正 統合歴史教科書 東洋史 終

青島市 大手町八丁目 火車に在る

青島市
大手町九丁目

各府縣下特約販賣所

- 【東京府】 丸善・青野・三友・文林堂・大倉・水野・林平・杉本・中西屋・文會堂・東京堂・二松堂・勉強堂・有隣堂・良明堂・東海堂・松邑・十字屋・北隆館・森江【神奈川縣】 弘集堂・勉強堂【靜岡縣】 吉見・三原屋・谷島屋【山梨縣】 柳正堂【愛知縣】 川瀬・永東
- 【長野縣】 西澤・朝陽館・水琴堂・日新堂・盛文堂【群馬縣】 煥乎堂【埼玉縣】 高野
- 【千葉縣】 多田屋【茨城縣】 川又・明文堂【栃木縣】 煥乎堂分舖・青木【宮城縣】 英華堂・金港堂【巖手縣】 佐藤・文明堂【山形縣】 八文字屋・盛文堂【秋田縣】 曙堂・藤島・東海林【青森縣】 今泉・今泉支店・青霞堂【北海道】 川南・富貴堂・魁文舍・二堂【新潟縣】 北光社・日黒・覺張・高桑・萬松堂・萬松堂支店・野島【岐阜縣】 郁文堂・郁文堂支店【富山縣】 中田・學海堂【三重縣】 安屋・岩田【大阪府】 松村・三宅・柳原・今井【京都府】 松田・若林【兵庫縣】 熊谷・中井・竹内【奈良縣】 木原【石川縣】 宇都宮【福井縣】 品川【滋賀縣】 廣田【岡山縣】 竹内
- 【廣島縣】 積善館・芸香堂【鳥取縣】 尙文館・徳岡・今井【島根縣】 川岡
- 【山口縣】 超世館・日新堂・舍英堂【香川縣】 開文舍・開益堂【德島縣】 靜壽堂
- 【愛媛縣】 向井・土肥【和歌山縣】 平安堂【長崎縣】 五郎川【宮崎縣】 修進堂【佐賀縣】 平井・牧川【福岡縣】 金文堂・佐野・積善館・博文社【熊本縣】 長崎【大分縣】 甲斐・中園・梅津【鹿兒島縣】 吉田【沖繩縣】 小澤【臺灣】 新高堂

大日本圖書株式會社
(調月十年三正大)

廣島分館 長崎製本所

